

新課程入試情報提供

2025年度大学入学共通テストの分析結果からみる課題と指導のポイント

目次

1. 英語	P2～P18	8. 地学	P63～P68
2. 数学①(数学Ⅰ, 数学A)	P19～P26	9. 地理総合, 地理探究	P69～P72
3. 数学②(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)	P27～P34	10. 歴史総合, 日本史探究	P73～P76
4. 国語	P35～P41	11. 歴史総合, 世界史探究	P77～P80
5. 物理	P42～P47	12. 公共, 倫理	P81～P85
6. 化学	P48～P55	13. 公共, 政治・経済	P86～P89
7. 生物	P56～P62	14. 情報Ⅰ	P90～P98

各スライド記載の、大学入学共通テスト本試験 正答率・マーク率は、河合塾「共通テストリサーチ」のデータを使用しています。

*「共通テストリサーチ」とは：全国の共通テスト受験生の自己採点結果・志望校を集計して、各大学の志望動向分析、入試難易度(ボーダーライン)の予測を行い、受験生の出願校検討をサポートするものです。

英語リーディング

(1) - 1 共通テスト分析 全体概況

■ 2024年度大学入学共通テスト 本試験フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	A 読解問題 (チラシ)	10	2
	B 読解問題 (案内)		3
第2問	A 読解問題 (チラシ)	20	5
	B 読解問題 (レビュー)		5
第3問	A 読解問題 (ブログ)	15	2
	B 読解問題 (学校新聞)		6
第4問	読解問題 (記事とアンケート結果)	16	6
第5問	読解問題 (物語文)	15	9
第6問	A 読解問題 (記事)	24	5
	B 読解問題 (論説文)		6
合計		100	49
平均点		51.54	
総word数 (河合塾調べ)		6,335	

■ 2025年度大学入学共通テスト 本試験フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	読解問題 (パンフレット)	6	3
第2問	読解問題 (ブログ)	12	4
第3問	読解問題 (記事)	9	6
第4問	読解表現融合問題 (レポート推敲)	12	4
第5問	読解問題 (メール)	16	6
第6問	読解問題 (物語文)	12	8
第7問	読解問題 (論説文)	16	6
第8問	読解表現融合問題 (レポート作成)	17	7
合計		100	44
平均点		57.69	
総word数 (河合塾調べ)		5,602	

* 形式に大きな変更あり (大問 6 題構成 → 8 題構成)。

* 「試作問題A・B」(令和4年11月発表)で示された、リーディングとライティングの融合を意図した問題が第4問と第8問に取り入れられた。

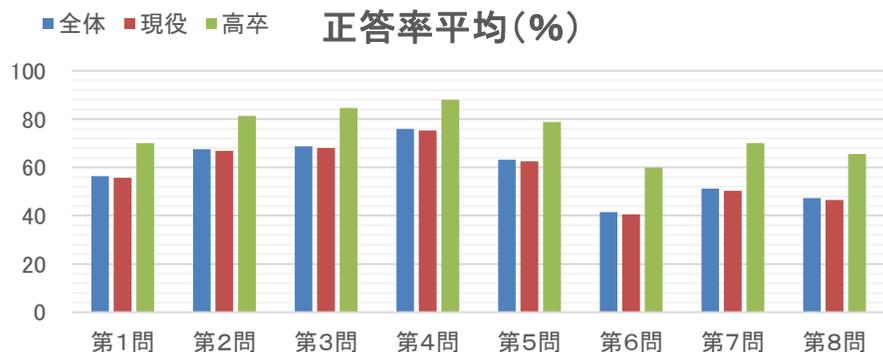
* 平均点はUP (51.54 → 57.69)。

* 総words数は約700減少。

英語リーディング

(1) - 2 共通テスト分析 現・卒差など

() は配点	平均点				正答率平均 (%)			
	全体	現役	高卒	現-卒差	全体	現役	高卒	現-卒差
全体 (100)	57.8	57.1	74.0	▲16.9				
第1問 (6)	3.4	3.3	4.2	▲ 0.9	56.3	55.7	70.0	▲14.2
第2問 (12)	8.1	8.0	9.8	▲ 1.8	67.5	66.9	81.3	▲14.4
第3問 (9)	6.2	6.1	7.6	▲ 1.5	68.7	68.0	84.6	▲16.6
第4問 (12)	9.1	9.0	10.6	▲ 1.6	75.9	75.3	88.0	▲12.7
第5問 (16)	10.1	10.0	12.6	▲ 2.6	63.2	62.5	78.8	▲16.3
第6問 (12)	5.0	4.9	7.2	▲ 2.3	41.5	40.6	59.9	▲19.3
第7問 (16)	8.0	7.9	11.0	▲ 3.1	51.2	50.3	70.0	▲19.6
第8問 (17)	8.0	7.8	11.1	▲ 3.3	47.3	46.5	65.5	▲19.1



河合塾「共通テストリサーチ」より

英語リーディング

(1) - 3 共通テスト分析 平均点の考察

平均点アップの要因(考察)



- ①総word数の減少 ➡ 大問数は増えたが、全体では約700減少したこと。
- ②模試の活用 ➡ 大学入試センターが試作問題を含めた8題構成での出題形式を「示唆」していたことから、河合塾の共通テスト模試ではそれを踏まえた構成で実施。
☞ 模試で実践演習を行ってきた受験者は、形式変化に十分対応できたと考えられる。
- ③解答に手間取る設問数の減少(5→2) ➡ “本文に述べられていない内容を選択させる設問”を解くためには**問題文全体を再度読み直す必要**がある。そのような設問が減ったこと。

2024年度	2025年度
第2問A 問2	➡ 第6問 問4
第2問B 問2	第7問 問1
第3問B 問2	
第4問 問3	
第6問B 問2	

2024年度本試験では、「全体を読む必要がある設問が前半(第2問・第3問)にも出題されていた。



本来、得点源にできる前半に、解答に手間取る設問が多くあり、読み切るのが大変に(全体で6300words超のボリューム)

➡ 2025年度はそのような設問が2題に減り、かつ、全体語数も減少

英語リーディング

(1)ー4 共通テスト分析 新傾向の大問(1/2)

第4問 読解表現融合問題 (レポート推敲) <試作問題Bタイプ>

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問1 [14]	66.3	65.8	76.4	▲ 10.6
問2 [15]	83.8	83.4	94.2	▲ 10.8
問3 [16]	73.5	72.8	89.1	▲ 16.3
問4 [17]	79.9	79.3	92.3	▲ 13.0

In summary, through a slow life, ⁽³⁾you can relax. Even small changes can improve your life. Avoid having non-essential items, spend quality time with people around you, and ⁽⁴⁾remember what you talked about with your friends. By doing these things, you will have a chance to live a better and more rewarding life.

Overall Comments:
You have really improved your essay. Keep working on it. I'm going to follow your suggestions to slow down and hopefully improve the quality of my life.😊

rewrite it.
(4) The underlined part doesn't describe your essay content well. Change it.

* 試作問題Bと設問形式は多少異なっていたが、全体として出来はよかった。

なお、24年度全統共通テスト模試でも、この『読解表現融合問題 (レポート推敲)』は第1回からプレテストまで、安定して得点できていた (平均得点率53.9%)。

* 「書くこと」をより意識した新しい形式ではあるが、英文のまとまりやつながりを問うような出題はセンター試験でも見られた。

【試作問題との相違点など】

問2 試作問題Bでは問3として“段落の第1文のトピックセンテンスを書き換えさせる (段落の内容と関連性のあるものを選択する) 形式”が出題されていたが、本試験では“段落の最終文に1文を挿入する形式”となった。

問3 試作問題Bでは問1として“段落の途中に1文挿入させる形式”が出題された。本試験では全体の要約を述べた最終段落で、“全体の内容、とくに第一段落の内容を考えて下線部の書き換えを選択する問題”が出題された。

英語リーディング

(1) - 4 共通テスト分析 新傾向の大問(2/2)

第8問 読解表現融合問題 (レポート推敲) <試作問題Bタイプ>

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問1 [38]	47.4	46.6	65.2	▲ 18.6
問2 [39]	51.8	51.0	69.3	▲ 18.3
問3 [40-42]	50.3	49.4	72.6	▲ 23.2
問4 [43]	50.8	50.0	68.7	▲ 18.7
問5 [44]	36.0	35.3	51.8	▲ 16.5

▶ [Step 2] Take a position

問3 Now that you have understood the various opinions, you have taken a position on space exploration and written some notes below. Choose the best options to complete [40] — [42]. (You must have all of [40] — [42] correct to get points.)

POSITION: Space exploration is not a good idea.

- [40] and [41] opinions support this the most.
- An argument common to these two people is that [42].

* 試作問題Aそのままの形式であった。

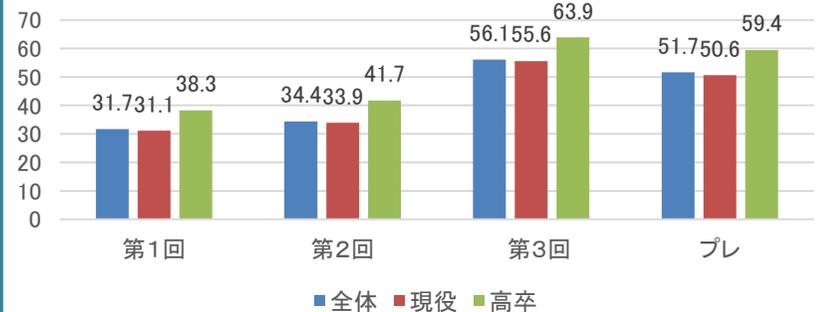
* 初めて解く場合は文章量に圧倒されるかもしれないが、模試で同様の形式に取り組んでいれば充分対応できた。

24年度全統共通テスト模試で、試作問題Aタイプを出題 (第6問) 第1回・第2回では3割台の得点率だったが、第3回・プレでは現卒ともに5割以上の得点率に!

【試作問題との相違点など】

問3 試作問題と異なり、[40]-[42]の3か所を完答できていないと得点にはならない。全体では比較的、出来はよかったが、現卒差は大きかった。(☞全設問中、4番目)

24年度 共通テスト模試 第6問 得点率



英語リーディング

(1)ー5 共通テスト分析 差がついた問題

現卒差が開いた問題 — 時系列を問う問題

第3問 問2

問2 Choose **four** out of the five options (①~⑤) and put them in the order they happened. → → →

- ① The band changed its attitude.
- ② The band decided to practise more often.
- ③ The band leader identified the problem.
- ④ The band leader was concerned about the...
- ⑤ The band registered for a contest.

全設問中、最も差がついた問い

第6問 問1

問1 Choose **four** out of the five descriptions (①~⑤) and put them in the order they occurred. → → →

- ① He is a hero again.
- ② He is a performer.
- ③ He is a professional writer.
- ④ He is a super park ranger.
- ⑤ He is an ordinary boy.

全設問中、2番目に差がついた問い

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問9-12	40.3	39.1	67.1	▲ 28.0

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問24-27	30.1	29.1	52.8	▲ 23.7

物語文や体験談などの、ストーリー性のあるまとまった英文を読み、述べられている出来事を時系列に沿って並べ換える問題。

➡全統共通テスト模試でも、上位・下位でも大きく差がつきやすい傾向が見られた

英語リーディング

(1) - 6 共通テスト分析 その他注目すべき問題(1/2)

その他 注目すべき問題 (出来がよくなかった問題など)

語い力が問われた問題

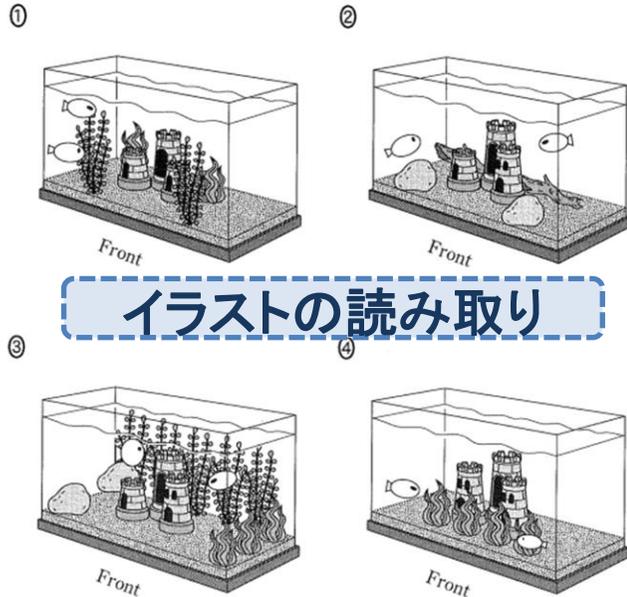
問 2 Flying vehicles will most likely .

- ① be used in small towns rather than large cities
- ② increase the number of traffic jams near hospitals
- ③ prevent solutions to environmental problems
- ④ require proper assessment and regulation

👉 第2問 問2 (45.2%)

正解の選択肢④にある、assessment/regulationの2つの語彙が難しかったと考えられる。ただし、共通テストの語彙レベルは二次私大試験と比べると高くはない。

イラストの読み取り



問 5 Choose the best heading for .

- ① Common Patterns of Sleep
- ② Natural Sleep Methods
- ③ Reasons for Sleep
- ④ States Similar to Sleep

👉 第7問 問5 (38.3%)

「一般」と「具体」の関係を読み取らないといけない。

→「具体例を一般化する」という思考力が問われており、受験生には馴染みがなかったと思われる。結果、解答のマーク率が散らばっていた。

- ① 14.9
- ② 23.9
- ③ 21.7
- ④ 38.3 (正解)

👉 第1問 問3 (35.2%)

完答が求められる設問以外で、**正答率がもっとも低かった。**

誤答選択肢③を選択したものが44.8%。
→イラストを注意深く見て判断する必要があった

小見出しを選択する問題

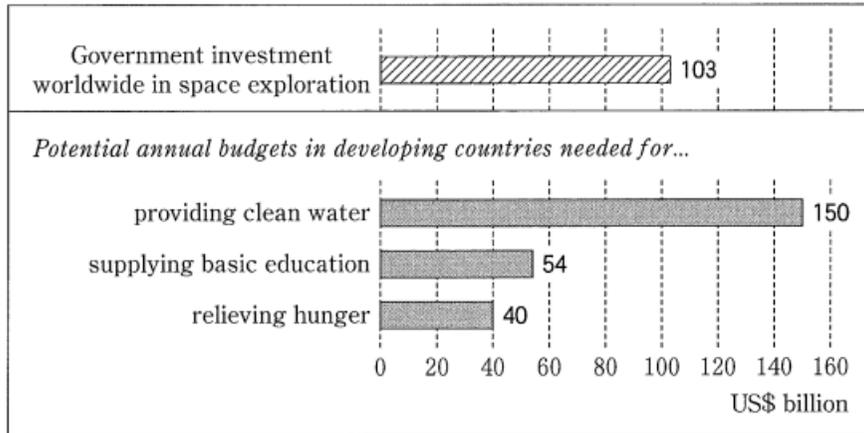
英語リーディング

(1)ー6 共通テスト分析 その他注目すべき問題(2/2)

グラフの読み取り&計算が必要な問題

Source B

Space exploration is getting more and more costly; in 2022 it was reported that the total amount of money spent by all the governments around the world was more than US\$100 billion. The graph below compares this cost with the annual budgets, estimated by international institutions, that would be required to address some of the world's most important issues.



👉 第8問 問5 (36.0%)

グラフを正しく読み取るだけでなく、簡単な計算も必要だった。難易度が高いうえに最後の設問。選択肢の分量も多く、時間に追われて読み切れなかった者は多かっただろう。

文法知識がカギとなった問題

問3 One guest speaker's opinion is that .

- ① flying taxi centres will be based in rural areas
- ② flying taxi technology has already been tested
- ③ flying taxis are already widespread
- ④ flying taxis are too expensive to run

👉 第2問 問3 (76.3%)

正答率は高めだったが、誤答の選択肢② (13.6%) を選んだ者は、第3段落3文めを文法的に正しく読み解けていなかったと思われる。

英語リーディング

(2) 課題と指導のポイント

■ 現役生に見られる課題 ■

- 物語文や体験談などの、ストーリー性のあるまとまった英文を読み、述べられている出来事を時系列に沿って並べ換えたりする問題が苦手な現役生が非常に多い（現卒差が大きい）。
- 語彙力・文法力が足りないために、正答に至れていない。



■ 学習対策 – 今後の指導 – ■

- (1) 読解力の基礎固め  正しく英文を読み取るために文法・語法、構文・イディオム・語彙に関する知識をしっかりと押さえておくこと。
- (2) 読解量アップ  『論説文』では、文と文の意味的なつながりや、段落単位でそのトピックや内容を整理。
 『物語文』では、登場人物の関係や、出来事が起こった順序を整理しながら読む。
- (3) 形式演習  模試で出来がよかった問題形式は、本試験でも出来がよい傾向がみられる。自信をもって本番に臨めるよう、形式に慣れておくことが必要！

英語

(1)ー1 共通テスト分析(リスニング) 全体概況

■ 2024年度大学入学共通テスト 本試験フレーム

大問	分野	*wpm	読み上げ 語数
第1問	A 短文発話内容一致問題	152	57
	B 短文発話イラスト選択問題	171	40
第2問	対話イラスト選択問題	110	117
第3問	対話文質問選択問題	148	300
第4問	A モノログ型図表完成問題	131	151
	B モノログ型質問選択問題	143	174
第5問	モノログ型長文ワークシート完成・選択問題	113	320
第6問	A 対話文質問選択問題	155	159
	B 会話長文意見・図表選択問題	142	223
平均wpm／合計読み上げ語数		134	1541
平均点		67.20	
総word数(読み上げ語数＋設問・選択肢の語数) (河合塾調べ)		1,541	

■ 2025年度大学入学共通テスト 本試験フレーム

大問	分野	*wpm	読み上げ 語数
第1問	A 短文発話内容一致問題	198	54
	B 短文発話イラスト選択問題	193	64
第2問	対話イラスト選択問題	154	85
第3問	対話文質問選択問題	145	299
第4問	A モノログ型図表完成問題	123	166
	B モノログ型質問選択問題	134	177
第5問	講義・討論型ワークシート完成・選択問題	117	367
第6問	A 対話文質問選択問題	139	171
	B 会話長文意見・図表選択問題	144	209
平均wpm／合計読み上げ語数		139	1592
平均点		61.31	
総word数(読み上げ語数＋設問・選択肢の語数) (河合塾調べ)		1,592	

*words per minute「毎分ワード数」

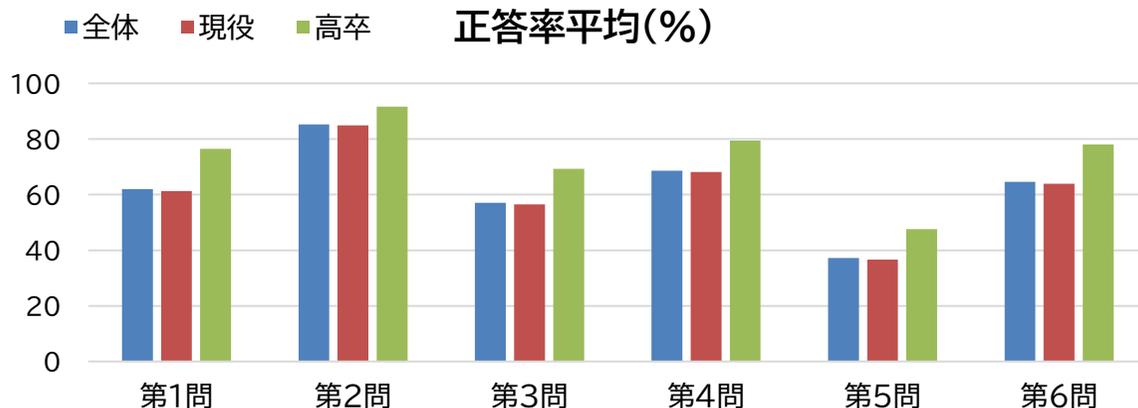


- ・ **第5問と第6問Bで形式の変更あり**。第5問の問32では「聴き取った情報を他者と共有する力」、問33では「グラフ資料を用いて話し合う力」を測る問題に変更。第6問Bでは「4人の学生の会話」から「3人の学生の会話」に変更。
- ・ 平均点は**DOWN** (67.20→61.31)。
- ・ 音声全体は聴き取りやすいが、読み上げ速度が**速い**問題が散見された。

英語

(1)ー2 共通テスト分析 (リスニング) 現・卒差など

() は配点	平均点				正答率平均 (%)			
	全体	現役	高卒	現-卒差	全体	現役	高卒	現-卒差
全体 (100)	61.7	61.1	73.5	▲ 12.4	62.4	61.9	73.8	▲11.8
第1問 (28)	17.4	17.2	21.5	▲ 4.3	62.0	61.3	76.5	▲15.2
第2問 (12)	10.2	10.2	11.0	▲ 0.8	85.2	84.9	91.6	▲ 6.7
第3問 (18)	10.3	10.2	12.5	▲ 2.3	57.1	56.5	69.3	▲ 12.8
第4問 (12)	7.9	7.8	9.2	▲ 1.4	68.6	68.1	79.4	▲ 11.3
第5問 (16)	6.8	6.7	8.5	▲ 1.8	37.2	36.7	47.6	▲ 10.9
第6問 (14)	9.0	9.0	10.9	▲ 1.9	64.6	64.0	78.1	▲ 14.2



河合塾「共通テストリサーチ」より

英語

(1)ー2 共通テスト分析 (リスニング) 大問比較

比較的出来が良かった大問

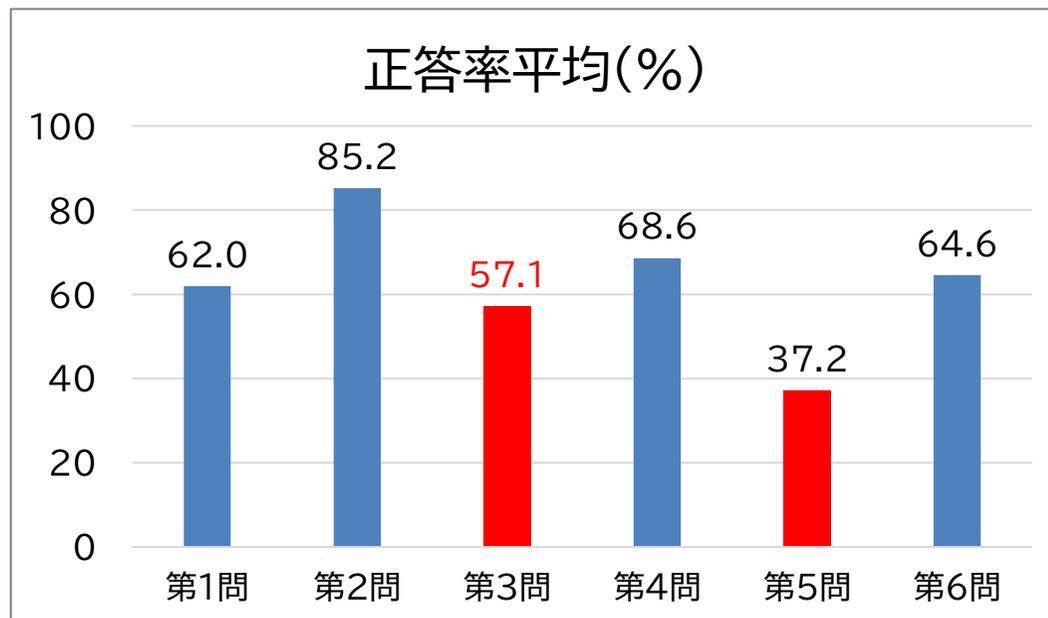
- ・ 第1問 (62.0%) A 短文発話内容一致問題
B 短文発話イラスト選択問題
- ・ 第2問 (85.2%) 対話イラスト選択問題
- ・ 第4問 (68.6%) A モノログ型図表完成問題
B モノログ型質問選択問題
- ・ 第6問 (64.6%) A 対話文質問選択問題
B 会話長文意見・図表選択問題

比較的出来が悪かった大問

- ・ 第3問 (57.1%) 対話文質問選択問題
- * 第5問 (37.2%) 講義・討論型ワークシート完成・選択問題

👉【第5問が全体の平均点を下げたと考えられる要因】

- Regiftingという概念に馴染みがなかったため、音声を聴く前に内容を予測するのが難しかったこと。
- ワークシートの問28～31が、聴き取った内容を他の表現に言い換える形式の問題であったこと。
- 問32が発言を聴いて真偽を答える問題であったこと。
- 問33の設問がディスカッションを聴いて講義内容とグラフ資料を統合させる形式の問題に変更されたこと。
- 問33の配点が4点から5点に増えたこと。



河合塾「共通テストリサーチ」より

英語

(1) - 2 共通テスト分析 (リスニング)

第5問 講義・討論型ワークシート完成・選択問題

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問27[27]	64.2	63.6	77.0	▲13.4
問28-31[28-29]	9.8	9.4	17.6	▲8.2
問28-31[30-31]	14.1	13.6	24.7	▲11.1
問32[32]	48.4	47.7	62.1	▲14.4
問33[33]	49.5	49.1	56.6	▲7.5

Regifting in the US 

Gift-giving can be harmful to the environment because .

How people currently feel:

Original givers		Regifters		Final receivers
unbothered	→	<input type="text" value="28"/>	→	<input type="text" value="29"/>

How to promote regifting:

- Events — regifting becomes .
- Systems — wasting gifts becomes .

リスニング全体で最も出来の悪かった設問
問28～31

聞こえてくる語彙や表現の言い換えができなかったことが、この設問の正答率の低下につながったと考えられる。

➔ **語彙学習が「英語を日本語に訳すこと」に重点を置いている点と、語彙を実際に使いこなす力が不足していることなどが考えられる。**

【選択肢】問28～31

- ① acceptable
- ② progressive
- ③ satisfied
- ④ unappreciated
- ⑤ uncommon
- ⑥ worried

 聞こえてくる語彙・表現を下記のように言い換え、選択肢を選ぶ必要があった。

問28 ... that regifters remain overly **concerned**. →⑥**worried**

問29 ... 90 percent of the final gift receivers were **content** with their gifts,... →③**satisfied**

問30 This information made the first group feel regifting was **OK**...と、Events like this would **encourage positive attitudes** towards regifting. →①**acceptable**

問31 ... that people would **hardly ever** throw away unwanted gifts. →⑤**uncommon**

英語

(1) - 2 共通テスト分析 (リスニング)

<形式変化のあった問題>

第6問B 会話長文意見・図表選択問題

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問36 [36]	51.7	51.1	65.5	▲14.4
問37 [37]	77.9	77.5	86.3	▲8.8

状況

三人の学生(Haruka, Emily, Doug)が、鳥にえさを与えることについて話をしています。

👉 4人から3人への会話に変更

2024年度までは発話者が4人であったが、2025年度は発話者が3人になり、さらに設問に対する該当者を特定する問題(2023,24年度の設問形式)→該当者の人数を特定する問題(2020年度から2022年度までの設問形式)に変更。設問内容が「該当者の人数を特定する問題」に変更されたことにより、解答がより求めやすくなったと考えられる。

問36

会話人数が3人になっても2024年度より正答率が下がっている要因は、「鳥にえさを与えるべきではない」という意見に対して3人全員が賛成という解答に対して、どこことなく違和感を感じたことが一因と考えられる。

👉 誤答の選択肢② (賛成2人) の誤答選択率が27.9%であった。

問36 マーク率	全体	現役	高卒
①	8.1	8.3	3.6
②	27.9	28.3	19.1
③ (正解)	51.7	51.1	65.5
④	11.3	11.3	11.2

問36 会話が終わった時点で、鳥にえさを与えるべきではないと思っているのは三人のうち何人でしたか。四つの選択肢(①~④)のうちから一つ選びなさい。

36

- ① 1人
- ② 2人
- ③ 3人
- ④ 0人

英語

(1)ー2 共通テスト分析 (リスニング) 差がついた問題

第3問 対話文質問選択問題 全設問の中で3番目に正答率が低かった問題

正答率	全体	現役	高卒	現-卒
問15[15]	38.1	37.4	53.6	▲16.2

問15 マーク率	全体	現役	高卒
①	3.9	3.9	3.1
②	51.7	52.4	36.4
③ (正解)	38.1	37.4	53.6
④	5.8	5.8	6.5

問15 二人の学生が演奏会の練習日について話をしている(対話)

男性が2回目の発話でIt's the day after **tomorrow**.と言っているのを聴き取り、

- ①Itがthe performanceを指していることと、
②the day after tomorrowが「明後日」という意味の2点を理解したうえで解答する必要があったが、

 男性の2回目の発話から聞こえてきた the day after tomorrowと、女性の2回目の発話から聞こえてきた tomorrow at 10:00?で、聞こえてきた **2度のtomorrow** の音声を頼りに答えを求めたと思われる**選択肢②の誤答の割合が高かった。**

対話

M: Let's have one more practice before our concert.

W: Good idea. Let's see when the practice room is available. How about today at 5:00?

M: Well, it's already 4:30, and we still have time before the performance. It's the day after tomorrow.

W: So tomorrow at 10:00?

M: Great. Then we'll be ready for the big day!

選択肢

When is the concert?

- ① Today at 4:30
② **Tomorrow** at 10:00
③ In two days (正解)
④ In five days

英語

(1)ー2 共通テスト分析 (リスニング)

<新課程をより意識した出題>

第5問 講義・討論型ワークシート完成・選択問題

→**試作問題どおり、問32は2人の発言を聴き取る形式・問33はディスカッション形式となった。**

	全体	現役	高卒	現-卒
問32[32]	48.4	47.7	62.1	▲ 14.4
問33[33]	49.5	49.1	56.6	▲ 7.5

活動2

あなたは、講義の要約を書く準備をしています。グループのメンバーA、Bと内容を口頭で確認しています。

問32

「聞く技能」により重点を置いた問題形式に変更。

2024年度までの「講義を聞いて、印刷された選択肢を選ぶ問題形式」から、2025年度は「2人の学生の発言を聴き取り、内容と一致しているかどうかの理解力を測る問題形式」に変更された。

2024年度までの「講義を聞いて、印刷された選択肢を読んで選ぶ（「聞く技能」→「読む技能」）」の形式の方が、2025年度の「講義を聞いた後に、その講義内容を口頭で確認し、その真偽を判断する（「聞く技能」→「聞く技能」）」の形式よりも、**印刷された選択肢を自分のペースで理解できる分だけ受験生にとって取り組みやすいように思える。**

問33

「やりとり（ディスカッション）」に重点を置いた問題形式に変更。

2024年度までの「前半の講義の続き（モノローグ）を聴き、全体の講義内容と与えられた図表から読み取れる情報を重ね合わせて内容を判断する力を測る問題形式」から、2025年度は「講義の内容を踏まえ2人の学生によるディスカッションから聴き取った情報と、問題文中に示されたグラフ資料から読み取った情報を統合的に処理する力を測る問題形式」に変更された。また、配点も4点から5点に増えた。

モノローグとやりとり（ディスカッション）では、聴き取りに必要な能力に顕著な差異はないように思える。

英語

(2) 共通テスト リスニング 課題と指導のポイント

■ 課題 ■

- 語彙を運用できる力（語彙・表現を言い換える力）が不足しているため、正答に結びつけることができていない。
- 聞こえた音声を頼りに、表現の言い換えをせずに選択肢を選ぶ傾向がある。
- 音声を聴く前に、内容をある程度予測する力が不足している。



■ 学習対策 – 今後の指導 – ■

(1) 語彙力の向上と短期記憶力の強化

☞ 英文を正確に聴き取る力を養うためには、語彙力を向上させることが重要。また、表現を言い換える力を身につけるためには、英英辞典を活用し、英語のフレーズや短い英文を覚える練習を通じて記憶力を鍛えることも効果的である。

(2) 演習量の増加

☞ 音声を聴く前に、選択肢やグラフ資料を素早く読み、その内容を迅速に理解したうえで、どのような内容や状況が想定されているかを予測する。

大問別の練習ポイント

- ・第1問 A 状況を1文で言い換えたりする練習。 B 「形状」「数量」「位置関係」などを表す表現を音声で聴き取る練習。
- ・第2問 場面の情報を参考にし、イラストを見ながら必要な情報を聴き取る練習。
- ・第3問 場面の情報を参考にしながら、概要や要点を目的に応じて把握する練習。
- ・第4問 A 比較表現を聴き取ったり、複数情報を整理したりする練習。 B 複数の情報を聴き、状況・条件に基づき比較し判断する練習。
- ・第5問 事前にワークシートを読み、内容を類推したり、表現を言い換えたりする練習。
- ・第6問 A 必要な情報を把握し、それらの情報を統合して要点を整理し判断する練習。 B 複数の話し手の意見を比較検討し、賛成や反対、類似点や相違点を判断する練習。

数学①
(数学I, 数学A)

(1)ー1 共通テスト分析

■大問別概要

問題番号	配点	出題内容	概要
第1問 [1]	10	数と式、集合と命題	方程式、必要条件・十分条件
第1問 [2]	20	図形と計量	三角比の定義、正弦定理、余弦定理
第2問 [1]	15	2次関数	噴水の水がえがく曲線、噴水の高さ
第2問 [2]	15	データの分析	散布図、外れ値、分散、共分散、仮説検定
第3問	20	図形の性質	五面体、2平面の交線、方べきの定理
第4問	20	確率	期待値を用いた料金の妥当性の考察

数学①
(数学I, 数学A)

(1)ー2 共通テスト分析(全体)

出題分野

- 数学I：出題分野に変化なし。
- 数学A：「場合の数・確率」「整数の性質」「図形の性質」から2分野選択だったが「図形の性質」と「場合の数・確率」の**2分野必答**に変更。
⇒**図形を苦手とする受験生が「図形の性質」を避けることができなくなった。**

出題内容

- 「データの分析」においては外れ値と仮説検定が新たに追加。
- 「場合の数・確率」において期待値が復活。
- 本年度は、**外れ値、仮説検定、期待値のすべてが出題され**、新課程色が強かった。
⇒外れ値、仮説検定、期待値の正答率は低くなく、対策していることが伺えた。

出題形式

- 変化は見られなかった。
- 採点に関しては「**解答記号～が全部正解の場合のみ～を正解とし、点を与える**」という、関係する設問の正解を前提とする採点基準が導入された。

数学①
(数学I, 数学A)

(1)ー3 共通テスト分析(問題編)

《前半を参考に後半を考えるという共通テストで頻出の流れに乗れない》

第1問 [2] 2点で交わる円とそれらに接する直線を舞台とした図形と計量の問題。

(1)は△PABについて考察するが、丁寧に誘導されているため正答率は高かった。

(コサ...87.3%, シ...74.3%, スセ...84.3%, ソ...82.7%, タチ...59.5%)

(2)は(1)の誘導を参考にまず△QABについて考察する。(次頁)

[2] 図1のように、直線ℓ上の点Aにおいてℓに接する半径2の円を円Oとし、ℓ上の点Bにおいてℓに接する半径4の円を円O'とする。円OとO'は2点で交わり、その交点をP、Qとする。ただし、∠APB < ∠AQBとする。さらに、∠PABは鋭角であるとする。このとき、△PABと△QABについて考えよう。

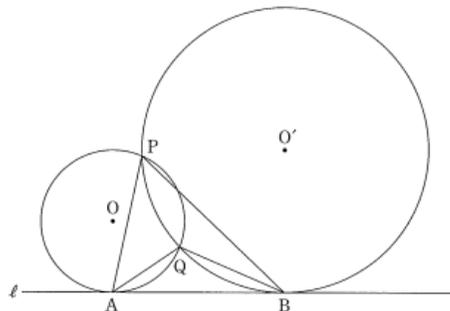


図 1

(1) ∠PAB = α, ∠PBA = β とおく。

円Oの中心Oから直線PAに引いた垂線と直線PAとの交点をHとする。∠OAB = 90°であるから、∠AOH = αである。よって、△OAHに着目すると、AH = sin α であるから

$$PA = 2AH = \text{サ} \sin \alpha \quad \dots\dots\dots \text{①}$$

である。

同様に、円O'の中心O'から直線PBに引いた垂線と直線PBとの交点をH'すると

$$PB = 2BH' = \text{シ} \sin \beta \quad \dots\dots\dots \text{②}$$

であることもわかる。

また、△PABの外接円の半径をR₁とおくと、正弦定理により

$$\frac{PA}{\sin \text{ス}} = \frac{PB}{\sin \text{セ}} = 2R_1$$

が成り立つので

$$PA \sin \text{セ} = PB \sin \text{ス}$$

である。この式に、①と②を代入することにより

$$\sin \text{セ} = \sqrt{\text{ソ}} \sin \text{ス}$$

$$PB = \sqrt{\text{ソ}} PA$$

となることがわかる。さらに

$$R_1 = \text{タ} \sqrt{\text{チ}}$$

が得られる。

,

の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

Ⓐ α	Ⓐ β
-----	-----

数学①
(数学I, 数学A)

(1)ー3 共通テスト分析(問題編)

第1問 [2] (2)

(1)を参考に R_2 を求めると、(1)の結果より $R_1 = R_2$ とわかる。

そうすると正弦定理より $\sin \angle APB = \sin \angle AQB$ であることもわかるが、ツテの正答率は19.9%しかない。

(1)は書かれている通り作業し正解できても、その理解が伴っていない受験生が多いと思われる。

② 太郎さんと花子さんは、(1)の考察を振り返っている。

太郎： $\triangle QAB$ の外接円の半径も求められるかな。
花子：(1)の R_1 の求め方を参考にすればよさそうだね。

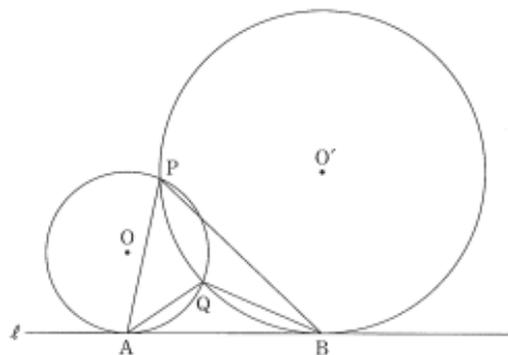


図1 (再掲)

$\triangle PAB$, $\triangle QAB$ の外接円の半径をそれぞれ R_1 , R_2 とおく。このとき、 R_1 R_2 である。さらに、 $\sin \angle APB$ $\sin \angle AQB$ であることもわかる。

, の解答群(同じものを繰り返し選んでもよい。)

① < ② = ③ >

数学①
(数学I, 数学A)

(1)－3 共通テスト分析(問題編)

《考察に必要な式を自分で導入できない》

第2問 [1] 噴水の水がえがく曲線に関する2次関数の問題.

正答率は4割を少し超える程度で最も出来が悪かった.

(1) 仮定1と仮定2のもとで考える。C₁をグラフにもつ2次関数を

$y = ax^2 + bx + c$ とする。このとき $c = \boxed{\text{ア}}$ であり、また

$$y = -\frac{\boxed{\text{イ}}}{\boxed{\text{ウ}}}x^2 - \frac{\boxed{\text{エ}}}{\boxed{\text{オ}}}x + \boxed{\text{ア}}$$

である。

C₁の頂点のy座標は $\frac{\boxed{\text{カ}}}{\boxed{\text{キ}}}$ である。このことを用いると、C₂の頂点

のy座標は $\frac{\boxed{\text{クケ}}}{\boxed{\text{コサ}}}$ であることがわかる。

したがって、大きな噴水の高さは、小さな噴水の高さの $\boxed{\text{シ}}$ である。

$\boxed{\text{シ}}$ については、最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- | | |
|---------|---------|
| ① およそ2倍 | ② およそ3倍 |
| ③ およそ4倍 | ④ およそ5倍 |

アの正答率は81.4%であり、イウエオについては58.9%であった。

クケコサについては、C₂の式を $y = px^2 + q$ などとおき、2点の座標を代入し連立方程式を解くだけであるにもかかわらず、27.2%の正答率しかなかった。

自分で必要な式を用意することができない、作業するだけの受験生が多いと思われる。

シは前にある2つの設問が正解している場合のみ正解を認められる新しい採点形式。

数学①
(数学I, 数学A)

(1) - 3 共通テスト分析(問題編)

《データの分析理論に関する理解が不十分》

第2問 [2] 外国人と日本人の宿泊者数に関するデータの分析の問題.

新しく追加された外れ値, 仮説検定に関する設問の正答率は、
外れ値が正答率65.0%, 仮説検定が54.3%とまずまずであった。

② 47都道府県におけるある年の外国人宿泊者数を x , 日本人宿泊者数を y とし, x と y の値の組を, それぞれ

$$(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_n, y_n)$$

と表す. x, y の平均値をそれぞれ \bar{x}, \bar{y} とし, x, y の分散をそれぞれ s_x^2, s_y^2 とする. また, x と y の共分散を s_{xy} とする.

47都道府県それぞれにおける外国人宿泊者数と日本人宿泊者数を足し合わせた合計宿泊者数を z とし, その値を

$$z_i = x_i + y_i \quad (i = 1, 2, \dots, 47)$$

と表す. 例えば, $i = 7$ のときは $z_7 = x_7 + y_7$ である.

z の平均値を \bar{z} とするとき

$$z_i - \bar{z} = (x_i - \bar{x}) + (y_i - \bar{y}) \quad (i = 1, 2, \dots, 47)$$

である. このことに着目すると, z の分散を s_z^2 とするとき, $s_z^2 =$ となる.

また, 令和4年の x と y の間には正の相関があることが図1からわかる. このことから, 令和4年について, s_z^2 と $s_x^2 + s_y^2$ の関係として, 後の②~

②のうち, 正しいものは であることがわかる.

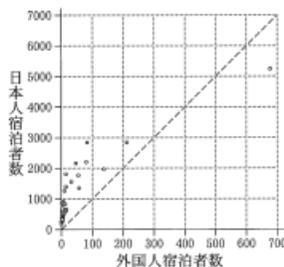


図1 (再掲)

の解答群

- ① $s_x^2 + s_y^2 - 2s_{xy}$ ④ $s_x^2 + s_y^2 + 2s_{xy}$
- ② $s_x^2 + s_y^2$
- ③ $s_x^2 + s_y^2 + s_{xy}$ ⑤ $s_x^2 + s_y^2 - s_{xy}$

の解答群

- ① $s_z^2 > s_x^2 + s_y^2$
- ② $s_z^2 = s_x^2 + s_y^2$
- ③ $s_z^2 < s_x^2 + s_y^2$

テ, トの正答率は選択肢問題であるにもかかわらずそれぞれ18.1%, 12.6%と低い.

トを正解するには散布図より共分散 s_{xy} が正であることを読み取る必要がある.

データの分析においては理論的な理解が軽視されている可能性が高い.

トはテが正解している場合のみ正解を認められる新しい採点形式.

数学①
(数学I, 数学A)

(2) 課題と指導のポイント

■ 課題 ■

●二次試験，私大入試では重要度が低い「図形と計量」と「図形の性質」の両分野で合計40点の配点があり，共通テストでは軽視できない。

今回の本試験では「図形の性質」の正答率はそれほど低くないが，共通テスト模試では，選択であった旧課程のときより，類似の設問に対する正答率が下がっていることが多かった。

●第1問[2]のように問題の前半は誘導が丁寧であっても，後半になると誘導がなくなることが多く，**理解力や考察力**が必要となる。

● **基本事項の理解が不十分**なため正解できない受験生が多い。第1問[1]の簡単な計算の設問などで文系生と理系生の正答率の差が2割以上になることがあり，**文系生の計算力不足**が懸念される。



数学①
(数学I, 数学A)

(2) 課題と指導のポイント

■ 学習対策－今後の指導－ ■

- 共通テスト用に**図形問題の演習を積む必要がある**。まずは時間をかけて考え、思考力および洞察力を養いたい。
- 数式を正確に扱う、数式で表現するなど数式に対する意識を高めたい。また、**実力不足である受験生に対しては、まずは共通テスト形式の問題ではなく、シンプルな問題の反復学習により、計算力の強化および基本事項を定着させることが大切である**。
- 問題の流れに乗るためには過去問演習が有効である。共通テストの過去問だけでなく、分野によってセンター試験の過去問も利用できる。過去問演習をする際、10月ごろまでは、時間をあまり気にせず分野別に理解重視で取り組むようにしたい。理解できないと速く解くことが不可能であるため、まずは一つ一つの分野の理解を深めるべきであろう。

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー1 共通テスト 大問別概要

(★を付した4問中3問を選択解答する。)

問題番号	配点	出題内容	概要
第1問	15	三角関数	$\sin A = \sin B$ の形の方程式を誘導に従って解く
第2問	15	対数関数	水草が水面を覆う面積、常用対数とその表
第3問	22	微分法・積分法	極大、極小、グラフ、積分、面積
第4問	★ 16	数列	領域内の格子点の個数
第5問	★ 16	統計的な推測	正規分布、二項分布、平均(期待値)、信頼区間、仮説検定(片側)
第6問	★ 16	ベクトル	座標、内積を含む座標計算
第7問	★ 16	複素数平面	垂直条件、軌跡

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)**(1)ー2 共通テスト分析(全体)****出題分野 (旧課程『数学Ⅱ・数学B』との比較)**

- 数学Ⅱ : 変化なし
- 数学B, 数学C : これまでは、「確率分布と統計的な推測」, 「数列」, 「ベクトル」から2分野選択だったが、新課程では、「数列(数学B)」, 「統計的な推測(数学B)」, 「ベクトル(数学C)」, 「平面上の曲線と複素数平面(数学C)」から3分野選択に変更。
⇒「数列」「ベクトル」はほぼ必修となった。
数学Cをあまり学習していない文系の生徒は「統計的な推測」を解答する必要がある。

出題内容

- 「統計的な推測」においては、区間推定のほか、仮説検定が出題された(「片側検定」が扱われた)。
- 試行問題で出題されていた「平面上の曲線(2次曲線)」からの出題はなかった。

出題形式

- 変化は見られなかった。
- 前の問題が正解の場合しか得点が与えられないという採点基準が昨年度に引き続き導入されている。

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー3 共通テスト 分析(問題編)

1) セット配点の増加

従前 (2024年 本試『数学Ⅱ・数学B』第2問)

(i) $f'(x) = 0$ となる x の値は $x = \frac{\text{ア}}{\text{イ}}$ である。

2点

(ii) $S(x)$ を計算すると

$$S(x) = \int_0^x f(t) dt$$

$$= \int_0^x (3t^2 - \text{ウ}t + \text{エ}) dt$$

1点

$$= x^3 - \frac{\text{オ}}{\text{カ}}x^2 + \text{キ}x$$

2点

であるから

1点

$x = \text{ク}$ のとき, $S(x)$ は極大値 $\frac{\text{ケ}}{\text{コ}}$ をとり

1点

$x = \text{サ}$ のとき, $S(x)$ は極小値 シ をとることがわかる。

1点

1点

(iii) $f(3)$ と一致するものとして, 次の①~④のうち, 正しいものは ス である。

3点

2024年の時点では
各設問単位での配点も多くあった。

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー3 共通テスト 分析(問題編)

1) セット配点の増加

新課程 (2025年 本試 第1問)

(1) $0 \leq \theta < \pi$ のとき, 方程式

$$\sin\left(\theta + \frac{\pi}{6}\right) = \sin 2\theta \quad \dots\dots\dots ①$$

の解を求めよう。以下では, $\alpha = \theta + \frac{\pi}{6}$, $\beta = 2\theta$ とおく。このとき, ①は

$$\sin \alpha = \sin \beta \quad \dots\dots\dots ②$$

となる。

(i) 二つの一般角 α と β が等しければ, $\sin \alpha$ と $\sin \beta$ は等しい。 $\alpha = \beta$ を満たす

θ は $\frac{\pi}{\boxed{\text{ア}}}$ であり, これは①の解の一つである。そして, $\theta = \frac{\pi}{\boxed{\text{ア}}}$ のとき

$$\sin\left(\theta + \frac{\pi}{6}\right) = \sin 2\theta = \frac{\sqrt{\boxed{\text{イ}}}}{\boxed{\text{ウ}}}$$

となる。

2点

新課程 (2025年 本試 第5問)

(2) の m を用いて, Q 地域で今年収穫されるレモンの重さの母平均 m g が過去の平均 110 g より軽いといえるかを, 有意水準 5% (0.05) で仮説検定を行い検証したい。ただし, 標本の大きさは 400, 母標準偏差は過去と同じ 20 g とする。ここで, 統計的に検証したい仮説を「対立仮説」, 対立仮説に反する仮定として設けた仮説を「帰無仮説」とする。このとき, 帰無仮説は「 $m = 110$ 」, 対立仮説は「 $\boxed{\text{サ}}$ 」である。これらの仮説に対して, 有意水準 5% で帰無仮説が棄却(否定)されるかどうかを判断する。

1点

いま, 帰無仮説が正しいと仮定する。標本の大きさ 400 は十分に大きいので, (2) の標本平均 \bar{W} は近似的に正規分布「 $\boxed{\text{シ}}$ 」に従う。無作為抽出した 400 個のレモンの重さの平均が 108.2 g となった。このとき, 確率 $P(\bar{W} \leq 108.2)$ は 0.「 $\boxed{\text{スセソタ}}$ 」となる。この値をパーセント表示した値は有意水準 5% より

1点

2点

「 $\boxed{\text{チ}}$ 」。したがって, 有意水準 5% で今年収穫されるレモンの重さの母平均は 110 g より軽いと「 $\boxed{\text{ツ}}$ 」。

2点

(スセソタが正解の場合のみ与えられる)

いくつかの空欄をまとめて得点する設問。

前の問題が正解しないと得点を与えられないことがある (2024 年本試にもその例はある)。

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー3 共通テスト 分析(問題編)

2)新規出題分野の傾向分析 【2025年 本試 第5問 統計的な推測】

(2)の m を用いて, Q 地域で今年収穫されるレモンの重さの母平均 m g が過去の平均 110 g より軽いといえるかを, 有意水準 5 % (0.05) で仮説検定を行い検証したい。ただし, 標本の大きさは 400, 母標準偏差は過去と同じ 20 g とする。ここで, 統計的に検証したい仮説を「対立仮説」, 対立仮説に反する仮定として設けた仮説を「帰無仮説」とする。このとき, 帰無仮説は「 $m = 110$ 」, 対立仮説は「」である。これらの仮説に対して, 有意水準 5 % で帰無仮説が棄却(否定)されるかどうかを判断する。

いま, 帰無仮説が正しいと仮定する。標本の大きさ 400 は十分に大きいので, (2)の標本平均 \bar{W} は近似的に正規分布 に従う。無作為抽出した 400 個のレモンの重さの平均が 108.2 g となった。このとき, 確率 $P(\bar{W} \leq 108.2)$ は 0. となる。この値をパーセント表示した値は有意水準 5 % より 。したがって, 有意水準 5 % で今年収穫されるレモンの重さの母平均は 110 g より軽いと 。 **13.9%**

「片側検定」の対立仮説を選択させる問題。正答率は46.0%で、ある程度正解できている。(「両側検定」の選択肢は省かれているので問題の誘導に乗れば答えられる)

その後、標本平均を正規分布で近似し、確率を計算。その確率と有意水準を比べて帰無仮説が棄却されるかどうかを問う。「シ」以降は正答率が急落した。

*ページ内の数値は正答率(河合塾「共通テストリサーチ」より)

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー3 共通テスト 分析(問題編)

2)新規出題分野の傾向分析 【2025年 本試 第7問 複素数平面】

(1) $\alpha = 3 + 2i$, $\beta = 7$, $\gamma = 7 + 10i$ の場合を考える。 $\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}$ の偏角を求めよ

う。

$$\left. \begin{aligned} \gamma - \alpha &= \boxed{\text{ア}} + \boxed{\text{イ}}i \\ \beta - \alpha &= \boxed{\text{ウ}} - \boxed{\text{エ}}i \end{aligned} \right\} 41.7\%$$

であるから

$$\frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha} = \boxed{\text{オ}} \quad 33.5\%$$

であり, $\boxed{\text{オ}}$ の偏角は $\boxed{\text{カ}}$ である。

(2) $w = \frac{\gamma - \alpha}{\beta - \alpha}$ とおく。直線ABと直線ACが垂直に交わるのは, w の偏角が

$\frac{\pi}{2}$ または $\frac{3}{2}\pi$ のときである。このとき, w は $\boxed{\text{キ}}$ であるから

$$w + \bar{w} = \boxed{\text{ク}} \quad 26.0\%$$

である。逆に, $w \neq 0$ に注意すると, $w + \bar{w} = \boxed{\text{ク}}$ のとき, w は $\boxed{\text{キ}}$

であるので, 直線ABと直線ACが垂直に交わる。

(1)与えられた3つの複素数に関して $(\gamma - \alpha)/(\beta - \alpha)$ の値を計算し、その偏角を求める。

(この時点では複素数平面の図形的知識は不要)

(2)複素数平面上の2直線の垂直条件と複素数による表現方法を問う。

どちらも基本的な問題であるが、偏角に関わる部分の正答率は下がっている。

*ページ内の数値は正答率(河合塾「共通テストリサーチ」より)

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)

(1)ー3 共通テスト 分析(問題編)

2)新規出題分野の傾向分析 【2025年 本試 第7問 複素数平面】

(3) (i) 前半省略

$$2 + \frac{2}{z} + \frac{2}{\bar{z}} = \boxed{\text{ク}}$$

と変形できる。さらに、この両辺に $z\bar{z}$ をかけて整理すると、直線 AB と直線 AC が垂直に交わるための必要十分条件は $\boxed{\text{ケ}}$ **16.7%** であることがわかる。したがって、直線 AB と直線 AC が垂直に交わるような点 z 全体を複素数平面上に図示すると $\boxed{\text{コ}}$ **16.2%** である。

途中省略

(ii) (i) の α, β, γ をそれぞれ -1 倍した複素数 $\alpha' = -\alpha, \beta' = -\beta, \gamma' = -\frac{4}{\gamma}$ について考える。複素数平面上の異なる3点 $A'(\alpha'), B'(\beta'), C'(\gamma')$ について、直線 $A'B'$ と直線 $A'C'$ が垂直になるような点 z 全体を複素数平面上に図示すると $\boxed{\text{サ}}$ **12.5%** である。

(iii) (i) の α, β, γ における z を $-z$ に置き換え、 $\alpha'' = -\alpha, \beta'' = -\beta, \gamma'' = -\frac{4}{\gamma}$ について考える。複素数平面上の異なる3点 $A''(\alpha''), B''(\beta''), C''(\gamma'')$ について、直線 $A''B''$ と直線 $A''C''$ が垂直になるような点 z 全体を複素数平面上に図示すると $\boxed{\text{シ}}$ **11.7%** である。

(3) (2)の結果に基づいて誘導に従い z の条件を複素数平面に図示する。 z と \bar{z} に関する条件から円の方程式を出す部分の正答率は低い。
(ii)以降はこれまでの状況を踏まえ、新しい問題にチャレンジする。

(ii)と(iii)はやや高度であるが、(i)までは教科書の章末問題レベルを演習しておけば十分に解答可能な問題である。

* ページ内の数値は正答率 (河合塾「共通テストリサーチ」より)

数学②
(数学Ⅱ, 数学B, 数学C)**(2) 課題と指導のポイント****◆共通テストの傾向◆**

- 成績上位生にとっては「どこかで見た」タイプの問題で、計算量の少ない問題が多い。
- セット配点が多用され、「何か書いていけば当たる」という作戦はとりにくい。
- 日常生活に関する問題では、見慣れない問題も出題されることがある。

**■学習対策－今後の指導－■**

- まずは、数学力をつけさせることが重要。
有名な設定の問題が多いので、2次対策用の問題にも積極的に取り組ませる。
- 問題文の文章が長くなる傾向があるので、しっかり読むべきところと、流し読みすればよいところの「緩急」をつけた読み方に慣れさせる必要がある。共通テスト用の問題集などで演習させるとよい。
- 出題者の誘導にうまく乗ることが重要。模範解答をじっくり見て、どういう意図でその解答が書かれたかを判断するなどの体験も効果的。

国語

(1) 共通テスト分析

選択肢の数がおおむね4つに。第1問、第2問は1つの文章からの出題。

国語は、近代以降の文章（現代文）に大問が一題追加され、試験時間が80分から90分に変更された。注目された第3問は試作問題Bの形式に類似しており、外来語の使用について複数の資料をもとに考察させる問題であった。受験生の負担増加が懸念されたが、複数の文章が出題されていた第1問、第2問では一つの文章からの出題に変更されたほか、国語全体で選択肢数を減らす変更もされたため、分量調整の配慮が行われたものと思われる。

■ 現役生のマーク率

問題番号	設問	解答番号	マーク率					
			1	2	3	4	5	6
第1問	問1	1	2.4%	2.4%	92.7%	2.5%		
		2	2.5%	29.2%	2.1%	66.3%		
		3	4.1%	59.9%	3.0%	33.0%		
		4	5.6%	4.2%	1.1%	89.0%		
		5	87.0%	3.3%	7.5%	2.2%		
	問2	6	3.4%	13.1%	15.5%	68.0%		
	問3	7	6.4%	5.4%	72.9%	15.2%		
	問4	8	19.6%	53.1%	21.9%	5.5%		
第2問	問5	9	14.9%	55.2%	11.5%	18.4%		
	問6	10	7.4%	79.4%	10.5%	2.7%		
	問1	11	76.5%	11.2%	6.4%	5.9%		
	問2	12	3.5%	11.9%	4.5%	80.1%		
	問3	13	3.2%	1.6%	74.3%	20.9%		
	問4	14	6.9%	4.0%	7.5%	81.6%		
	問5	15	47.4%	10.3%	27.0%	15.3%		
第3問	問6	16	88.0%	6.9%	2.8%	2.3%		
	問7	17	5.2%	12.2%	10.9%	71.6%		
	問1	18	1.8%	85.8%	6.4%	6.0%		
		19	17.6%	4.8%	6.5%	71.1%		
	問3	20	14.8%	14.7%	19.3%	51.3%		
		21	28.9%	59.4%	11.7%			
		22				23.2%	70.8%	6.0%

問題番号	設問	解答番号	マーク率				
			1	2	3	4	5
第4問	問1	23	5.1%	59.1%	32.8%	2.9%	
		24	63.9%	12.4%	19.4%	4.3%	
		25	6.0%	4.0%	78.4%	11.7%	
	問2	26	7.7%	47.0%	37.4%	5.5%	2.4%
	問3	27	9.9%	18.6%	12.3%	59.2%	
		28	7.3%	64.0%	19.5%	9.2%	
29		6.2%	12.4%	21.4%	60.0%		
第5問	問1	30	6.8%	5.0%	73.0%	15.3%	
		31	76.8%	12.1%	5.9%	5.2%	
	32	3.6%	7.7%	2.4%	86.3%		
	問2	33	13.7%	12.2%	13.0%	61.1%	
	問3	34	9.8%	71.1%	8.7%	10.4%	
	問4	35	9.9%	16.4%	59.5%	14.2%	
		36	4.6%	25.2%	18.8%	51.4%	
問5	37	6.6%	10.6%	49.8%	33.1%		
	38	6.8%	15.2%	12.2%	65.9%		

=正答

河合塾「共通テストリサーチ」より

現代文

(1)－1 共通テスト分析

〔第1問〕

共通テスト初年度から続いていた、複数の文章を読解して答える問題がなくなり、一つの評論文を読解して答える問題のみになった。また、従来は漢字の問題を除いて選択肢が五つだったが、四つに変更された。従来型の問題を練習していた受験生にとっては、時間に余裕が生まれ、取り組みやすくなったと思われる。

問2から問6は傍線部に関するオーソドックスな問題だったが、問4と問5は正答率が五割五分前後である。どちらの問題も本文後半の内容をある程度広い範囲で読解する必要があり、論理展開を踏まえて評論文を読み通す力を養っておかないと、解答の根拠が正しく把握できずに迷ってしまったかもしれない。なお、漢字問題のうち「散策」の正答率は三割程度にとどまっている。

〔第2問〕

第1問と同様に、複数の題材を組み合わせた問題がなくなり、一つの小説文を読解して答える問題のみになった。選択肢も四つに変更された。ただし、昨年より本文が長かったことに加え、昨年復活した語句の意味を問う問題が出題されず、問1から問7まですべて読解問題だったという点で、受験生の負担感が昨年より減少したとは言えないだろう。

問5の表現の問題は迷う選択肢がないはずだが、正答率が五割を切っている。「表現」が問われていることに留意して選択肢を吟味する必要がある。また、問7は設問の意図がわかりにくいところがあるが、正答率は七割程度である。

〔第3問〕

2025年から新たに加えられた第3問では、新学習指導要領で重視されている「思考力・判断力・表現力」をはかるため、図表やグラフなどを含む複数の題材を関連づける問題や、言語活動に関わる問題が出題された。題材は、Uさんという生徒が与えられた課題について書いたとされる【文章】と、【資料Ⅰ】（図三つ）、【資料Ⅱ】（実用文）、【資料Ⅲ】（図とそれについてのメモ）であり、問1は図の読み取りの問題、問2は【文章】の表現を修正する問題、問3（i）は図の読み取りの問題、（ii）は【文章】を加筆・修正する問題である。

一般的な現代文の問題とは異なり、図表やグラフを正しく読み取る力や、出題者から与えられた文章を推敲する力が求められている。なお、問3（i）は解答を選ぶのにやや迷う問題であり、正答率も五割程度にとどまっている。全体としては、2022年に大学入試センターが発表した試作問題よりも解きやすかったと思われるが、こうした問題を解き慣れていないと解答に時間を要してしまう可能性がある。

古文

(1)－2 共通テスト分析

【形式】

- ・マーク数が、従来より一つ減り、七つだった。ただし、漢文で一つ増え、古典全体でのマーク数は昨年と同じで、国語全体としても昨年と同じマーク数だった。
- ・問2を除いて四択になった。国語全体の中で、古文の問2だけが五択であった。

【本文】

- ・本文は、文章Ⅰ・文章Ⅱを併記する複数テキストで、文章量は、おおむね6：4。文章Ⅱの内容は、その後半部分の会話文の内容を問う問3（i）で問われただけ（配点7点）で、それ以外は文章Ⅰからの出題であった。
- ・文章Ⅰでは、「もののけ」の正体が「女君」であることを読み取れるかどうか読解上の焦点となるが、問3（ii）（iii）に関わる会話や選択肢を見ると、それがわかるようになっている。
- ・和歌は、共通テストになってから、本試験では必ず問われている。

【設問】

- ・問1の解釈の設問の傍線部が短く、各傍線部中には、多くの受験用の単語帳に掲載されている古語が含まれ、かつ単語帳の訳語を暗記していれば容易に正解できるように選択肢が作られていた。
- ・近年、連続して出題されていた「語句と表現に関する説明」の設問がなかった。
- ・センター試験時代に何度か出題された「敬語の説明」の設問が課された。各選択肢は、敬意の方向と敬語の種類とを記すが、「おはせ」が尊敬語、「きこゆる」が謙譲語だとわかれば正解できるようになっていた。
- ・問3は、近年にも出題されている、会話の空欄三箇所を補充する形式であった。

【正答率】

- ・古文の得点率は約六割で、大学入試センター試験を含めても、2016年度に次いで、史上二番目に易しかった。
- ・問2の正答率が最も低かった。
- ・問1（ア）も正答率が低く、誤答の中では③が多く選ばれていた。

漢文

(1)－3 共通テスト分析

〔本文〕

今年度は【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】として江戸時代の二人の儒学者の論評が出題されたが、【文章Ⅰ】は『論語』の注釈書であり、『論語』の一節が掲げられている体裁であるので、提示された本文は、実質的には三つである。主題は「学問論」であり、学びについて、二人の儒学者に共通する考えを把握させる問題である。

〔設問〕

問1は語の意味、問2は理由説明、問3は文の解釈、問4は返り点と書き下し文、問5は語の意味、問6は二つの本文の趣旨説明である。問1も問5も語の意味を問うているが、問5はいずれも「また」と読む漢字「又」と「亦」について、現代文の例文を選択肢として掲げて問う新傾向の問題であった。「複数の本文を対照して、多角的に考える」という共通テストの典型的な問題は、問6の主旨説明の問題だけであった。

〔正答率〕

全体の正答率は六割であり、まずまずの出来であった。すべての設問が四択であったので、これまでの五択に比べて正誤を判断しやすかったと思われる。また、問1の語の意味の問題が易しめであったことも、正答率を押し上げた一因であろう。

最も出来が悪かったのが問4で、正答率は二割にも満たなかった。白文を訓読する問題は受験生が最も苦手とする問題であるが、その通りの結果であった。基本句形が正答のポイントとなる場合もあるが、訓読の問題では、何よりも語の意味・用法をふまえて句や文の構造を正しく把握することが求められている。構造を捉える力が未習得のまま入試を迎えるため、語の意味にだけ注目して構造を考えずに解答する、あるいは与えられた選択肢の書き下し文のみを見て正誤判断をする受験生が多いようである。問5もいま一步の出来であった。「又」と「亦」の読みがいずれも「また」であるという情報は与えられていることから考えると、現代語の「また」や漢文の「又」「復」「亦」の用法や意味の相違を明確に理解していない受験生が少なくないように思われる。正答率はいずれも五割程度に留まった。

一方、問3の解釈の問題や問6の主旨説明の問題は、なかなかの出来であったようだ。問3の正答率は七割強、問6の正答率は六割半ばであった。大まかな内容をつかめていれば、選択肢を検討することで、読み取れていない箇所を理解する手がかかりも得られ、正誤の判断はつけやすいからであろう。解釈の問題の場合には、基本句形の知識も正解の助けとなっているようである。

現代文

(2)－1 課題と指導のポイント

■課題■

- ある程度の長さの評論文を、論点に沿って読み通す力を養う。
- 小説では、登場人物の心情やありようを読み取るだけでなく、表現の特徴にも注意する。
- 漢字をはじめ、言葉の知識を身につける。
- 共通テスト第3問では、図表やグラフの読み取り、言語活動に関する問題に対応できるようにする。



■学習対策－今後の指導－■

- (1) 評論では本文全体の論理展開、小説では登場人物の人物像やその作品のもつ世界観といったことにも意識を向けることで、解答の根拠がある程度広い範囲にわたっている問題にも対応できるようにしたい。
- (2) 文章の内容を読み取るだけでなく、表現効果にも注意し、文章の理解を深めることが望ましい。
- (3) 漢字の苦手な生徒や語彙力の乏しい生徒も少なくない。日頃から知識を身につける努力を続けたい。
- (4) 共通テスト第3問は、読解中心の一般的な現代文の試験とは異なる問題が出題されることが予想される。図表の読み取りや文章の修正などの問題演習を積み、てきぱきと解けるようにしておきたい。
- (5) 2025年度共通テストは平均点が例年と比べて高かったため、2026年度共通テストでは今年よりも難しい問題が出題される可能性がある。また、共通テストの現代文は、まだ傾向が定まったとは言い難い。第1問や第2問で再び複数テキストの問題が出題される可能性も含めて、できるだけ多様な問題に触れておきたい。

古文

(2)－2 課題と指導のポイント

■課題■

- 共通テストになって、いったん知識を問うことを控える傾向があったが、年々その比重が増している。
- 後の設問や選択肢を読むことで、本文の難読箇所を克服できる、試験慣れの影響の大きい出題。
- 得点率が非常に高かったことで、次年度の難化が警戒される。



■学習対策－今後の指導－■

- (1) 文法や単語の知識を軽視せず、基礎的なことを生徒にしっかり覚えさせる。
- (2) 共通テスト型の形式を含めて、試験問題を解くことに生徒を慣れさせる。
- (3) 最新の過去問が易しいことに安心させない。
- (4) 基礎的なことをしっかり覚えさせつつ、それを読解につなげる力を養う。
- (5) やや難しい本文であっても、安易に設問や選択肢に頼らず、自ら読解する力を養う。

2025年度本試験では、試験形式への慣れの影響が大きい出題だったと思われるが、それはあくまでも例年と比較してのことである。形式演習も重要だが、次年度の試験もそれが高得点に結びつくと思わず、基礎的な練習を積ませることが、さらに重要である。

漢文

(2)－3 課題と指導のポイント

■課題■

文の構造を正しく捉えて一文一文の意味を正確に読み取り、文章の趣旨を確実に把握する。

- 重要語や慣用句・基本句形の理解と習得に努める、基本的な学習を大切にする。
- 一語一語の意味を考えるだけでなく、語順に注目して文の構造を正しく捉える。
- 文章の主題をふまえて、趣旨を確実に把握する。



■学習対策－今後の指導－■

文の構造を捉えて、各語のそこでのふさわしい意味を判断し、文意を正確に読み取る訓練が基本である。

(1) 語の意味の問題に強くなる。

- * 漢和辞典を用いた学習をしている事例はとても少ないようであるが、語彙を豊かにし、語意に強くなるには、辞書をまめに引き、説明をよく読むことが最良の学習法である。

(2) 文の構造を正しく捉えられるようになる。

- * 基本句形はそれぞれによく学習しているようであるが、文の構造に留意する受験生は少ない。英語のような格変化や日本語の助詞や助動詞に当たる語が発達していない漢文(古典中国語)は、語順とそれぞれの語の意味・役割(品詞)によって構造を形成することに気づく学習が肝要である。

★ 選択肢の検討以前に、各自の力で本文を読解できる力を養う、オーソドックスな指導が有効である。

物 理

(1)－1 共通テスト分析

新課程へ移行する際の最も大きな変化は、「思考力・判断力・表現力」の育成である。2021年度から実施されている共通テストでは、新課程への移行に先立ち、探究活動に基づく問題が出題され、「思考力・判断力」が評価されてきた。しかし、新課程へ完全移行した今年度の共通テストは、2020年度以前のセンター試験の出題傾向に近い問題が多く出題された。

2025年度共通テスト（本試験）「物理」の設問ごとの分析を、河合塾「共通テストリサーチ」データを基に行った。その分析からみえてきた内容を以下に示す。分析で用いたデータの平均点（データ数）は

全体 58.7点 (52,298) 現役生 57.6点 (48,326) 高卒生 71.8点 (3,972)

であり、令和7年2月6日に大学入試センターが発表した平均点 58.96 と大きな差はない。

物 理

(1)－2 共通テスト分析

■大問別概況（物理）

問題番号	配点	難易	出題内容	概況
第1問	25	標準	小問集合	各分野の基本問題。設問ごとの正答率に大きな差があった。問1, 問2の正答率は80%を超えていたが, 問3, 問4は20%を下回っていた。問5の正答率は約60%。
第2問	25	標準	単振り子	単振り子の周期測定に関する問題。探究活動の問題であったが, 状況が把握しやすく, 大問全体の得点率は約65%であった。大問4題の中で得点率は最も高かった。
第3問	25	標準	A 気体の状態変化 B 波の干渉	Aは, 気体の状態変化に関する典型的な問題。3設問中2設問で正答率の現卒差が20%を超えていた。 Bは, 波の干渉の実験に関する問題。実験に基づく問題であったが, グラフを読み取ることができればよく, 得点率は高かった。
第4問	25	標準	導体棒の電磁誘導	磁場中を平行移動する導体棒の電磁誘導に関する問題。大問全体の得点率は4題中最も低かった。また, 全ての設問で正答率の現卒差が大きかった。

物理

(1) - 3 共通テスト分析

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト(本試験)「物理」第1問 問3 解答番号3】

正答率が極めて低い設問①

作用線の異なる3つの力の合力の向き・大きさ・作用点を求める問題である。正解の選択率は16.0%と極めて低い。選択肢⑦の選択率は40.2%であり、正解の選択率の2倍以上であった。この誤答は、力の向きを考慮せずに、「同じ向きで平行な2力の合力の作用点の位置は、2力の作用点を力の大きさの逆比に内分する点」という知識を適用してしまった結果であろう。

問3 図2のように、正方形の薄い板のふちに、板面を含む平面内で三つの力がはたらいている。板の中心を点Oとする。一つの力は、大きさFで板の頂点Pに作用し、その向きは線分OPに垂直で図の下向きである。残り二つの力は、それぞれ線分OPから反時計回りに30°と150°の方向を向いた大きさ2Fの力であり、それらの作用線は点Oで交わっている。図中の三つの力の合力を表す図として最も適当なものを、後の①～⑧のうちから一つ選べ。ただし、線分OPの長さをLとする。 3

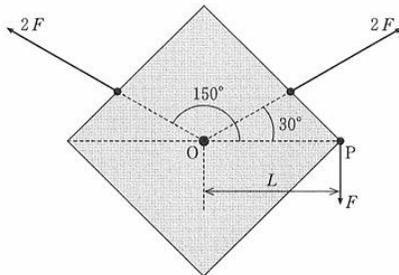


図 2

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

物理

(1)－4 共通テスト分析

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト(本試験)「物理」第1問 問4 解答番号4】

正答率が極めて低い設問②

電場・磁場中を通過した電子の速さの大きさを比較する問題である。正解の選択率は17.1%であった。最も選択率が高かったのは選択肢①で37.8%であり、第1問 問3と同様に正解の選択率の2倍以上であった。また、選択肢⑦の選択率も17.5%で、正解の選択率を上回っている。基本的な内容ではあるが、電場と磁場の違いを意識せずに、感覚的に解答を選択してしまった結果であろう。

問4 図3に灰色で示す真空中の領域Rを電子が通過している。電子の入射速度は一定である。領域Rに、電子の入射速度の向きに垂直に一樣な電場(電界)をかけ、さらに同じ領域に適当な磁場(磁界)をかけると、電子は速度の向きを変えずに直進して、速さ v_1 で領域Rを出た。電場を維持して磁場を0にしたとき、磁場を維持して電場を0にしたときには、電子は速度の向きを変えて、それぞれ速さ v_2 、 v_3 で領域Rを出るようになった。 v_1 、 v_2 、 v_3 の大小関係を表す式として最も適当なものを、後の①～⑦のうちから一つ選べ。

4

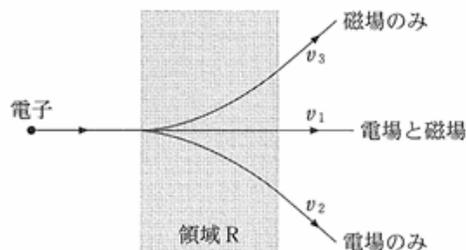


図 3

① $v_1 > v_2 = v_3$

② $v_2 > v_3 = v_1$

③ $v_3 > v_1 = v_2$

④ $v_1 > v_2 > v_3$

⑤ $v_2 > v_3 > v_1$

⑥ $v_3 > v_1 > v_2$

⑦ $v_1 = v_2 = v_3$

物理

(1) - 5 共通テスト分析

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト(本試験)「物理」第3問 問3 解答番号13】

現卒差が最も大きい設問

始状態と終状態が等しい2通りの気体の状態変化において、内部エネルギーの変化量と気体がした仕事、および気体に加えられた熱量の大小を解答する設問。現役生と高卒生の正解率はそれぞれ49.5%と72.1%であり、22.6%の差があった。ただし、現役生の上位層では正答率が80%以上あり、かなり高い。誤答はどこかに集中することなく広く分布しており、現役生の中下位層が定性問題を苦手に行している様子が伺える。

問3 次の文章中の空欄 **ア** ・ **イ** に入れる語句の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑧のうちから一つ選べ。 **13**

前問のA→B→Cの変化を逆に変化させたC→B→Aの変化を過程Iとす。また、新たに、図2に示すようなC→Aの過程IIを考える。過程Iと過程IIで気体が外部にした仕事を W_1 、 W_2 、気体の内部エネルギーの変化を ΔU_1 、 ΔU_2 としたとき **ア** であるため、外部から気体に加えられた熱量は、**イ** の方が大きい。

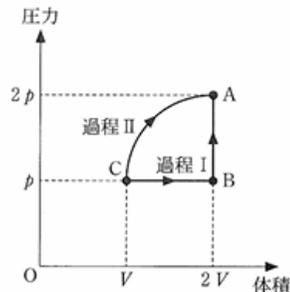


図 2

	ア	イ
①	$\Delta U_1 > \Delta U_2$ かつ $W_1 = W_2$	過程 I
②	$\Delta U_1 > \Delta U_2$ かつ $W_1 = W_2$	過程 II
③	$\Delta U_1 < \Delta U_2$ かつ $W_1 = W_2$	過程 I
④	$\Delta U_1 < \Delta U_2$ かつ $W_1 = W_2$	過程 II
⑤	$\Delta U_1 = \Delta U_2$ かつ $W_1 > W_2$	過程 I
⑥	$\Delta U_1 = \Delta U_2$ かつ $W_1 > W_2$	過程 II
⑦	$\Delta U_1 = \Delta U_2$ かつ $W_1 < W_2$	過程 I
⑧	$\Delta U_1 = \Delta U_2$ かつ $W_1 < W_2$	過程 II

物 理

(2) 共通テストへの指導のポイント

■ 共通テストの特徴 ■

- 実験・観察の過程を扱った、探究活動に基づいた問題が出題されている。
- 多くの受験生が苦手とする、公式を適用しづらい定性問題が出題される。
- 二次・私大入試では出題されることが少ないテーマが扱われることがある。
- 原子分野を含め、幅広い分野から出題される。

■ 学習対策－今後の指導－ ■

- 実験データは理論値の周囲で揺らぐことや、そもそも理論が知られていない場合もあることを受験生に周知徹底し、データの取り扱いを学習させる。
- 問題演習で間違えた理由を考えさせるなどして、基本的な法則・公式の意味を生徒に理解させ、柔軟に活用できるようにする。
- 二次・私大入試で頻出の内容だけでなく、生徒が疎かにしがちな内容を再確認させ、知識の抜けが無いように指導する。

化学

(1)－1 共通テストの概況

化学の全範囲から満遍なく出題された。海水からの塩化ナトリウムや淡水の製造，化学発光，昆布や地下水からのヨウ素の製造，原油の分留と利用，高分子の合成など，人間活動と関連する題材の問題が例年以上に多くみられた。また，例年同様に問題文やグラフ・図から必要な情報を読み取り，解答に至る手順を設定しながら原理・法則を当てはめて計算したり，適切なグラフを判断したりするなど，思考力が重視された。

2025年度共通テスト（本試験）「化学」の設問ごとの分析を，河合塾「共通テストリサーチ」データを基に行った。その分析からみえてきた内容を以下に示す。分析で用いたデータの平均点（データ数）は

全体：45.3点（67,824） 現役生：44.3点（62,841） 高卒生：57.7点（4,983）

であり，令和7年2月6日に大学入試センターが発表した平均点 45.34 とほぼ等しい。

化学

(1) - 1 共通テストの概況

■大問別概況 (化学)

問題番号	配点	平均点	出題内容	概況
第1問	20	8.4	物質の構成 物質の状態	結晶の分類, 理想気体と実在気体, 気体の溶解度, コロイド, 希薄溶液の性質が出題された。問3 気体の溶解平衡(35.0%), 問5a 沸点上昇(36.2%), 問5b 逆浸透(11.1%)が思考力を要し, 正答率が低かった。
第2問	20	8.5	物質の変化	化学反応と光, ニッケル・カドミウム電池, 弱酸の電離平衡, ハーバー・ボッシュ法の化学平衡が出題された。問3 弱酸の水溶液の体積とpH(25.7%)および問4c アンモニアの体積百分率の時間変化(35.8%)のグラフ選択問題の正答率が低かった。
第3問	20	9.8	無機物質 物質の変化	遷移元素の化合物, ケイ酸ナトリウムと水ガラス, 気体の生成と性質, ヨウ素を題材とした問題が出題された。問4c ヨウ化ナトリウムの濃度を求める反応の量的関係の問題(34.3%)は, 数値そのものを答える形式であったことも影響して正答率が低かった。
第4問	20	9.6	有機化合物 高分子化合物	天然有機化合物・合成高分子化合物も含めて出題された。問4b 空欄イ(PVAc→PVAの反応名の選択:39.1%), 問4c アセタール化率の計算(29.2%)の正答率が低かった。
第5問	20	9.1	原油由来の物質 に関する総合問題	原油を分留して得られた留出物に関する総合問題であった。問1 原油の分留での留出物の名称の組合せ(21.8%), 問3c V_2O_5 からVを生成させる二経路の反応エンタルピーの大小比較(27.9%)の正答率が低かった。
第6問	20	11.2	(第5問と同内容)	(旧教育課程履修者等に配慮した問題)

※()内は正答率を表しています。

化学

(1) - 2 共通テスト分析 第1問より

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト「化学」第1問問5 a 解答番号5】

海水を90℃で沸騰させるための適切な圧力を選択する問題

水溶液の沸点上昇および圧力と沸点の関係の理解をもとに、両者の現象を複合的に考察して得られる結果から、蒸気圧曲線を用いて適切な圧力を読み取る思考力が試された。

第1問 問5 a

a 海水から NaCl を製造する工場では、濃縮した海水から水を蒸発させて NaCl を得ている。図1に、濃縮した海水から水を蒸発させて NaCl の結晶を得る装置を模式的に示す。容器 A で発生する水蒸気を使って容器 B を加熱することで、水の蒸発に必要な熱エネルギーを節約している。

図1の装置では、容器 A から供給される 100℃ 以上の水蒸気で容器 B を加熱する。さらに容器 B 内を減圧し、NaCl 水溶液が 90℃ で沸騰するようにしている。このとき、容器 B 内の圧力は何 Pa か。最も適当な数値を、後の①~④のうちから一つ選べ。ただし、容器 B の NaCl 水溶液の沸点上昇度(沸点上昇の大きさ)は 8 K であるとする。また、図2に水の蒸気圧曲線を示す。 5 Pa

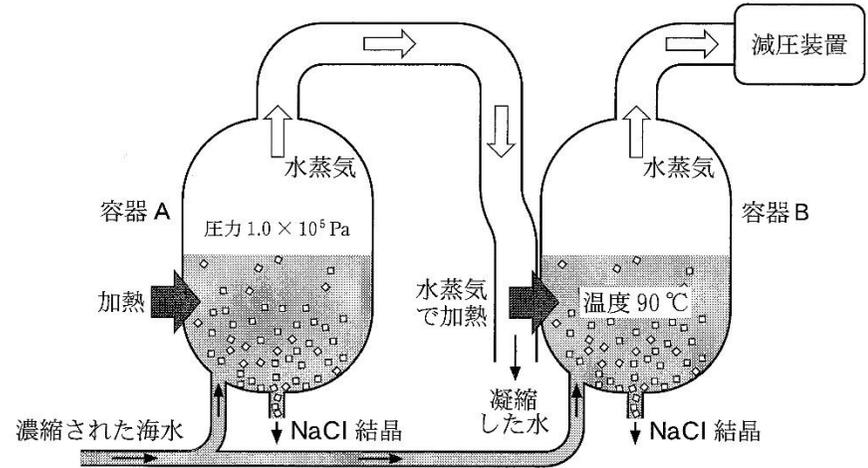


図1 濃縮した海水から水を蒸発させて NaCl の結晶を得る装置の模式図

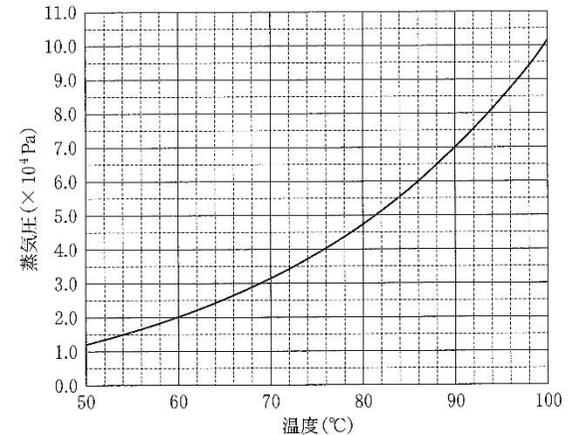


図2 水の蒸気圧曲線

- ① 5.1×10^4 ② 7.0×10^4 ③ 7.6×10^4 ④ 9.4×10^4

化学

(1)ー2 共通テスト分析 第1問より

■正答状況からみた考察

【2025年度共通テスト「化学」第1問問5 a 解答番号5】

正解①: 正答率 36.2 % (現役生35.0 %, 高卒生50.2 %)

海水をNaCl水溶液と見立て、その水溶液が90°Cで沸騰するときの圧力を、水の蒸気圧曲線から読み取る問題である。NaCl水溶液の沸点上昇度(沸点上昇の大きさ)が8 Kであることが示されていることから、与えられた水の蒸気圧曲線から水の沸点が $(90 - 8) = 82^\circ\text{C}$ のときの圧力を読み取ればよく、その圧力は、 $5.1 \times 10^4 \text{ Pa}$ である。高卒生ではおよそ半数の受験生が正答しているのに対し、現役生では35.0 %の正答率にとどまった。誤答の選択率でもっとも高かったのは、現役生、高卒生ともに② $7.0 \times 10^4 \text{ Pa}$ であり、現役生33.2 %, 高卒生24.2 %であった。この圧力は90°Cでの蒸気圧の値であり、沸点上昇度を考慮せずに単純に90°Cの値を読み取ったものと思われる。なお、③の選択率は、現役生16.5 %, 高卒生11.3 %, ④の選択率は、現役生14.3 %, 高卒生13.6 %であった。③は100°Cから8 Kを引いた92°Cの蒸気圧の値であり、④は90°Cに8 Kを加えた98°Cの蒸気圧の値であった。

水溶液の沸点上昇および圧力と沸点の関係の知識を組み合わせ、複合的に考察する必要があり、与えられた情報を分析する力が求められる問題であった。

化学

(1) - 3 共通テスト分析 第4問より

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト「化学」第4問 問4c 解答番号28】

PVAのアセタール化に関する計算問題

ポリビニルアルコール(PVA)のブチルアルデヒドによるアセタール化に関して、PVAと生成物のポリビニルブチラールの質量から、アセタール化されたヒドロキシ基の割合を求める問題である。入試頻出であるビニロンの問題での考え方や解法を、物質の変更に対応して適切に当てはめる思考力が試された。

第4問 問5c

c ポリビニルアルコール(PVA) (繰り返し単位の式量 44.0) は、HCHO の代わりにブチルアルデヒド $\text{CH}_3\text{CH}_2\text{CH}_2\text{CHO}$ (分子量 72.0) を反応させても、図2のようにアセタール化することができる。すなわち、一つの炭素原子をはさんで二つのエーテル結合をもつ化合物を合成できる。この高分子はポリビニルブチラールとよばれ、接着剤や塗料などに用いられる。

PVA 88.0 g をアセタール化したとき、ポリビニルブチラール 120.4 g が得られた。このときPVAのヒドロキシ基のうちアセタール化された割合は何%か。最も適当な数値を、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 %

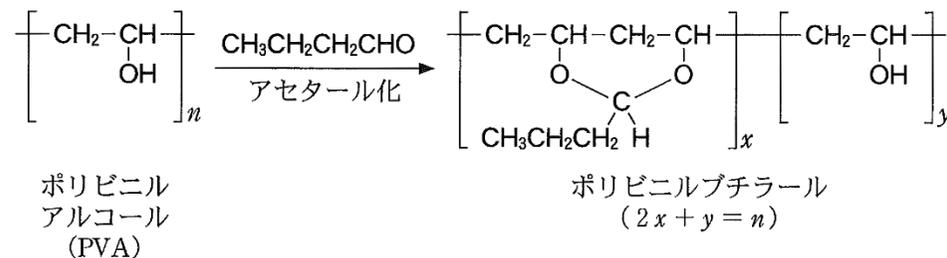


図2 ポリビニルブチラールの合成経路

- ① 30 ② 45 ③ 60 ④ 67 ⑤ 82 ⑥ 85

化学

(1) - 3 共通テスト分析 第4問より

■ 正答状況からみた考察

【2025年度共通テスト「化学」第4問 問4c 解答番号28】

正解③: 正答率 29.2 % (現役生 28.6 %, 高卒生 36.8 %)

解法のバリエーションはいくつかあるが、例えば、

(PVAの物質質量) = (ポリビニルブチラールの物質質量)

$$\frac{88.0}{44.0n} = \frac{120.4}{142.0x + 44.0y}$$

$$\frac{88.0}{44.0 \times (2x + y)} = \frac{120.4}{(44.0 \times 2 + 54.0)x + 44.0y}$$

$$\frac{88.0}{44.0 \times (2x + y)} = \frac{32.4}{54.0x}$$

$$\frac{2x}{2x + y} = \frac{32.4}{54.0} = 0.600 = 60\%$$

なお、反応したブチルアルデヒドの物質質量は、

$$\frac{88.0}{44.0 \times (2x + y)} \times x = \frac{32.4}{54.0}$$

多くの受験生が解いた経験をもつと思われるビニロンでの同様の計算問題における考え方を、うまく応用できたかがポイントであったが、「大学入試センターの思惑どおり」低い正答率であった。

誤答の選択率でもっとも高かったのは、現役生、高卒生ともに④ 67 % であり、現役生 31.6 %, 高卒生 24.7 % であった。これは、問題文の図2の見た目から $x:y=1:1$ と非常に単純に考えて、 $\frac{2x}{2x+y} = \frac{2}{3} = 0.666 = 67(\%)$ と導いたのであろう。

公式の丸暗記などではなく、考え方を正確に身につけているかが試された問題であった。

化学

(2) -1 課題と指導のポイント

■課題■

今回取り上げた問題を含めて共通テスト全体を通じて、問題で与えられた情報・条件と原理・法則を適切に関連づける力の不足がみられる。具体的には、

- 与えられた情報・条件をかみ砕いて読み取る力
- 図表やグラフのどこに着目すればよいかを見きわめる分析力
- どの原理・法則と関係するかを見だし、原理・法則とどのように結びつくかを考察する力
- 計算問題では、解答に至る手順を思い描き、何を未知数として式を組み立てるのか、どのような順番で求めていけばよいのかを判断する力

が不足している受験生が多い。

化学

(2) - 2 課題と指導のポイント

■ 学習対策－今後の指導－ ■

基本的な知識を身につけながら、さらに前記のような応用力を養成する必要がある。

- 教科書記載の重要事項を整理・確認させた上で、教科書傍用問題集などで演習を積み重ねることで知識を定着させ、原理・法則に関する理解を深めておくことが重要である。単に公式を覚えて数値を当てはめるやり方では太刀打ちできない問題が増えており、普段から、原理・法則がどのように関係するかを考えながら問題文を読み取り、「なぜこのような式を立てるのか」を意識し、計算式の立て方や考え方を理解しながら学習するように指導していきたい。
- 近年の共通テストでは、実験考察問題をはじめ、グラフを読み取る問題やグラフを選択する問題の出題が多くなっている。問題文で与えられたグラフや、表などのデータから作図したグラフをもとに、化学的な法則性を見いだしたり、実験結果を考察したりする問題と、得られる結果を予測して、それに当てはまるグラフを判断する問題の両方が出題されている。できるだけ多くの問題に取り組ませ、グラフの形を判断したり、ポイントとなる点をみつけて分析したりする力を養っておく必要がある。
- 教科書記載の実験やグラフに触れておくことはもちろんだが、可能であれば実験演習を行い経験を積み重ねておきたい。授業時間数の制約などで実験演習が困難な場合は、映像の利用や図説の参照、既存の実験問題に取り組ませるなどの方法でカバーしておきたい。また、受験生にとって馴染みのない目新しいテーマが題材として扱われることがあるので、高得点を目指す学生には、教科書の「発展」で扱われるテーマについても二次・私大入試の問題や模試などを利用して取り組ませ、既習の知識や原理・法則と関連付けて内容を読解したり、判断したりする思考力を養う経験を積み重ねたい。

生物

(1) - 1 2025年度共通テストの概要

■生物基礎

大問	分野	テーマ
1	生物の特徴	A 細胞, 細胞周期, 翻訳
		B タンポポの再生, 代謝
2	ヒトの体の調節	A 心拍と呼吸の調節, 神経系
		B 免疫
3	生物の多様性と生態系	A 生態系
		B バイオーム

平均点: 31.4点(去年は31.6点)

新課程になっても、大問数や出題分野、各大問がA・Bに分けられている点など変化がなく、マーク数や全体の難易度も大きな変化はなかった。設問文や図表に基づいて考察する問題が増加し、平易な知識問題が減少した。また、去年は出題されなかった仮説検証型問題、計算問題、会話文に基づく問題が出題された。なお、第2問では免疫に関する問題が7年連続で出題された。

■生物

大問	分野	テーマ
1	生物の環境応答 生物の進化 など	味覚の多様性
2	生命現象と物質 など	アミノ酸の役割と代謝
3	生態と環境	種の多様性と植物の物質生産
4	遺伝情報の発現 と発生	両生類の胚発生
5	生物の環境応答	A イネの品種改良
		B 重力屈性

平均点: 52.2点(去年は54.8点)

大問数が6題から5題に減少したが、新課程になっても形式や出題傾向などの大枠は変化がなかった。各分野から幅広く出題があり、複数の分野の内容を含む大問もあった。考察問題が多く、知識のみで解答できる問題が減少した。昨年まであった会話文に基づいた問題は出題されず、設問文や図表をもとに考察する問題が増加し、平易な知識問題が減少した。

生物

(1) - 2 共通テスト分析

■2025年度共通テスト本試「生物基礎」第1問 問5
解答番号106

仮説を検証するための実験について、実験の結果とそこから導かれる考察から実験手順を考える問題であった。

正答率は39.4%であり、全設問の中で最も低かった。

論理的に考える力が要求される問題であり、難度が高かった。

問 5 同じく下線部(d)に関連して、新しく芽をつくるにはエネルギーが必要とされるはずである。このエネルギーについて、「根は葉の光合成で生産された有機物を蓄えており、この有機物から呼吸によって取り出したエネルギーを使って芽をつくる」という仮説を立てた。次のページの図3は、この仮説を検証するために計画した一連の実験を示している。図3中の「ウ」～「オ」に入る語句の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。 106

	ウ	エ	オ
①	O ₂	照 射	グルコース
②	O ₂	照 射	リン酸
③	O ₂	遮 断	グルコース
④	O ₂	遮 断	リン酸
⑤	CO ₂	照 射	グルコース
⑥	CO ₂	照 射	リン酸
⑦	CO ₂	遮 断	グルコース
⑧	CO ₂	遮 断	リン酸

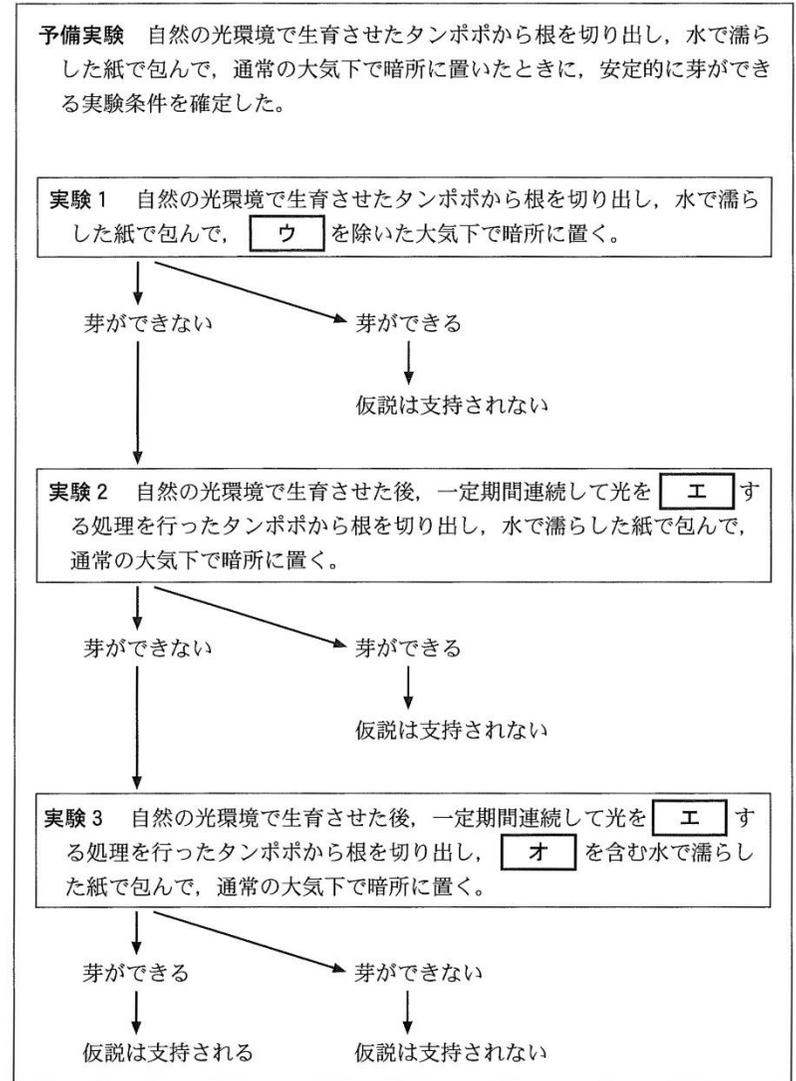


図 3

生物

(1)ー2 共通テスト分析

■2025年度共通テスト本試「生物基礎」第3問 問2・3 解答番号114、115

会話文に基づいた形式の問題であり、探究活動の過程を意識した問題であった。

正答率は問2が61.6%であり、問3が67.0%であった。

考察問題としての難度はそれほど高くなかった。

A アサさんとヨウさんは、展示施設でクジラの標本を観察しながら話をした。

ア サ：これは、近くの海岸に座礁して、死んでしまった^(a)マッコウクジラの骨格なんだよ。

ヨ ウ：座礁した14頭のうち、1頭は生きのまま海へかえすことができたけど、残りは死んで、そのうち12頭の死体は海底に沈められたんだって。^(b)深海の底では完全に分解されるまでに10年以上かかるって聞いたよ。

ア サ：1頭の^(c)死体は砂浜に埋められて、その後、この骨格標本として保存されたんだね。

ヨ ウ：^(d)死体を処分場で燃やすことも考えられるけど、そうしたらどうなっていたらう。

問2 下線部(b)に関連して、生態系には、生物の遺体(遺骸)の分解が遅い生態系と速い生態系がある。次の記述①~③のうち、生態系内で生物の遺体(遺骸)の分解が遅くなることに直接関係する理由として適当なものはどれか。それを過不足なく含むものを、後の①~⑦のうちから一つ選べ。 114

- ① 細菌・菌類の代謝が遅い。
- ② 生物の遺体(遺骸)を消費する生物の総量が少ない。
- ③ 光合成を行う生物の総量が少ない。

- ① ① a
- ② ② b
- ③ ③ c
- ④ ④ a, b
- ⑤ ⑤ a, c
- ⑥ ⑥ b, c
- ⑦ ⑦ a, b, c

問3 下線部(c)・(d)に関連して、死体にこのような処理が行われた際に起こる現象の記述として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。

115

- ① 埋められた死体の化学エネルギーは、ほかの生物に取り込まれ、その生物の生命活動に利用される。
- ② 死体の化学エネルギーは、燃やされる過程で熱エネルギーとなり、その熱エネルギーは、ほかの生物の同化によって化学エネルギーに変換される。
- ③ 埋められた死体の有機物は、ほかの生物によって無機物に変換され、その無機物は、大気中へは放出されない。
- ④ 燃やされた死体は、無機物となって大気中に放出され、その無機物は、ほかの生物に利用されない。

生物

(1) - 2 共通テスト分析

■2025年度共通テスト本試「生物」第2問 問3(1)

解答番号9

提示された仮説を検証するための実験について、仮説が正しかった場合の実験結果を考える問題であった。

正答率は76.9%であった。

解答に生物の知識を必要とせず、考察問題としての難度は高くなかった。

問 3 同じく下線部(b)に関連して、あるガの幼虫 S は、植物 A の葉を食べ、そこから体内に吸収したアミノ酸を利用して成長する(図 2)。幼虫 S からの食害を感知した植物 A は、直ちに多量のトレオニン脱アミノ酵素(以下、TD 酵素)を合成し、それが幼虫 S の消化管に取り込まれる(図 3)。TD 酵素は、トレオニンを有機酸 B に分解する酵素であり、植物 A の TD 酵素は、幼虫 S の消化管内でもその触媒作用を発揮できる(図 4)。

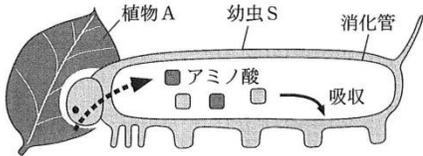


図 2

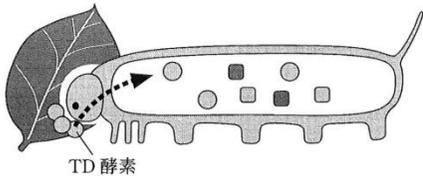


図 3

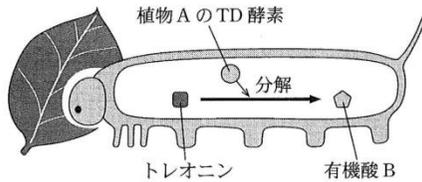


図 4

(1) これらの事実から、「植物 A の TD 酵素は、幼虫 S の消化管内でトレオニンを分解することで、吸収可能なトレオニンの量を減らし、幼虫 S の成長を抑制する」という仮説を立てた。この仮説を検証するために、TD 酵素を合成できない植物 A の変異体(以下、変異体 M)を用いた実験を計画し、その結果を予想した。仮説が正しかった場合の結果を予想した次の文章中の **ウ** ~ **オ** に入る語句の組合せとして最も適当なものを、後の①~⑧のうちから一つ選べ。 **9**

変異体 M の葉を食べさせた幼虫 S は、植物 A の野生株の葉を食べさせた幼虫 S よりも、体重の増加が **ウ** と予想される。また、変異体 M の葉と共に多量の TD 酵素を与えて幼虫 S を育てると、変異体 M の葉のみを与えた場合と比べて、幼虫 S の体重の増加が **エ** と予想される。他方、野生株の葉と共に多量の **オ** を与えて幼虫 S を育てると、野生株の葉のみを与えた場合と比べて、体重の増加が速くなると予想される。

	ウ	エ	オ
①	速くなる	さらに速くなる	TD 酵素
②	速くなる	さらに速くなる	トレオニン
③	速くなる	遅くなる	TD 酵素
④	速くなる	遅くなる	トレオニン
⑤	遅くなる	速くなる	TD 酵素
⑥	遅くなる	速くなる	トレオニン
⑦	遅くなる	さらに遅くなる	TD 酵素
⑧	遅くなる	さらに遅くなる	トレオニン

生物

(1) - 2 共通テスト分析

■2025年度共通テスト本試「生物」第5問 問4
解答番号23

提示された複数の実験について、それらの実験結果から導かれる推論を考える問題であった。

正答率は21.4%であり、全設問の中で2番目に低かった。

限られた情報から論理を構築する必要があり、難度が高かった。

B 果実はふつう植物体の地上部に形成されるが、一部の植物種では地中に果実が形成される。ラッカセイでは、図3に示すように、花は地上で咲くが、果実は地中に形成される。これは、受粉後に(C) 子房がついている柄の部分(以下、しぼうへい子房柄)が正の重力屈性を示しながら著しく伸長し、子房を土の中に潜り込ませるためである。

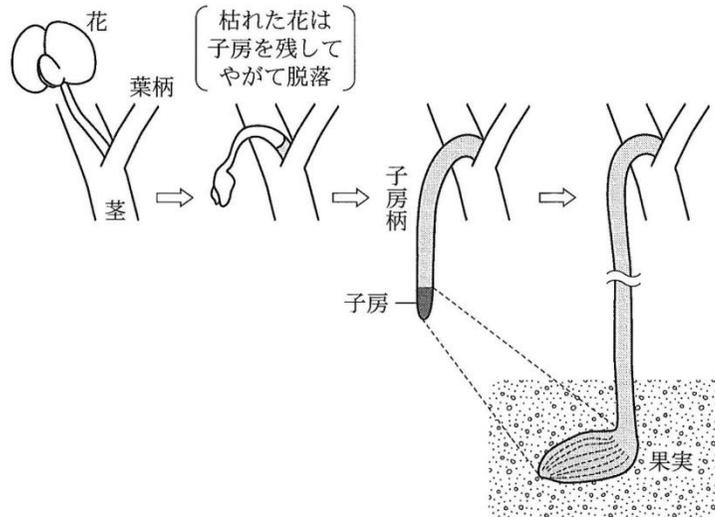


図 3

問 4 下線部(C)に関連して、植物は重力に対する応答として、オーキシンの分布の変化を介して細胞伸長を制御することで、重力屈性を引き起こすことが知られている。このことを踏まえ、ラッカセイの子房柄における重力屈性の仕組みを調べるために、実験1～3を行った。後の記述①～③のうち、実験1～3の結果から導かれる推論として適当なものはどれか。それを過不足なく含むものを、後の①～⑦のうちから一つ選べ。 23

実験1 子房がついたままの子房柄を水平にすると、子房柄は正の重力屈性を示した。

実験2 子房を切除した後、子房柄を水平にすると、子房柄は重力屈性を示さなかった。

実験3 子房を切除し、子房柄の切断面全体に様にオーキシンを与えた後、子房柄を水平にすると、正の重力屈性を示した。

- ① 重力屈性には、子房柄における重力方向の感知が必要である。
- ② 重力屈性に十分な量のオーキシンを子房柄に供給するためには、子房でのオーキシンの合成が必要である。
- ③ 子房柄におけるオーキシン分布の変化には、子房でのオーキシン輸送の変化が必要である。

- ① a
- ② b
- ③ c
- ④ a, b
- ⑤ a, c
- ⑥ b, c
- ⑦ a, b, c

生物

(1)－3 2026年度共通テストの展望

2025年度の共通テストは、旧課程生への配慮があって新課程と旧課程の共通分野からの出題がほとんどであり、そういう意味では新課程の影響があまり現れていないともいえる。このため、旧課程生への配慮がなくなる2026年度以降は、2025年度よりもより新課程のカラーが出やすくなることが予想される。なかでも注意したいのは、新課程となって、教科書で新たに扱われるようになった内容や、教科書での扱いが大きくなった内容、あるいは、『生物基礎』と『生物』の間で移行があった内容からの出題である。

教科書で新たに扱われるようになった内容

生態系の保全

『生物基礎』の「生物の多様性と生態系」の単元、および、『生物』の「生態と環境」の単元の中で、生態系の保全に関する内容の教科書での扱いが大きくなった。それに伴い、「生態系サービス」「種多様性」「SDGs」「環境アセスメント」などの内容がほとんどの教科書に記載されるようになった。

脳死・免疫

『生物基礎』の「ヒトの体の調節」の単元において、中枢神経系に関連して「脳死」が扱われるようになった。また、ほとんどの教科書で「がんの免疫療法」が扱われるようになり、一部の教科書では「COVID-19」も扱われるようになった。

生物から生物基礎に移行した内容

DNAの複製、遺伝情報の発現

DNAの複製の過程や遺伝情報の発現の過程については、旧課程では『生物基礎』で簡単な内容を扱い、『生物』で詳細な内容を扱っていたが、新課程では『生物基礎』でかなり詳細に扱われるようになった。複数の『生物基礎』の教科書で、「メセルソンとスタールの実験」も参考として記載されている。また、ほとんどの『生物基礎』の教科書で「遺伝暗号表」「tRNA」「アンチコドン」が扱われるようになり、複数の『生物基礎』の教科書では「ニーレンバーグやコーラナーの実験」も参考として記載されている。

生物

(2) 指導のポイント

■学習対策 —今後の指導に向けて—

1. 今年度の共通テストでも、新課程となった影響はあまりみられず、教科書の内容も大きくは変化していないことから、基本的には指導の方針をこれまでと比べて大きく変える必要はないと考えられる。
2. 次年度以降、教科書での扱いが新課程となって変化した内容については、出題が増加する可能性があり、注意が必要である。
3. ただ、新課程となって教科書で「太字」となっている用語が減少し、さらに探求の過程を重視した学習の充実が求められていることから、入試で問われる内容が、「思考力・判断力・表現力」を問う方向へと少しずつシフトしていく可能性も考えられる。
4. しかしながら、課題や仮説を設定したり実験計画を立案したり、あるいは実験結果を解釈したりする上で、生物の基本的な知識・技能が必要なのは当然であり、教科書の内容をしっかりと理解して知識を身に付けることの重要性は、今後も変わることはないだろう。

地学

(1) 2025新課程入試でのポイント

新学習指導要領では「地球環境に対して主体的に関わり、課題を解決する態度」に向けた力の養成を強調

・新学習指導要領では旧学習指導要領の「地学的に探究する能力と態度の育成」に加えて

「自然環境の保全に寄与する態度」および「自然の事物・現象を総合的に考察しようとする態度」の育成が求められるようになった。

→新課程では、旧課程以上に観察、実験、探究活動に重点を置いた学習が必要とされる。

2. 新学習指導要領の変更点

2-1 地学の目標の変更

新学習指導要領における地学の目標は、「地球や地球を取り巻く環境に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、地球や地球を取り巻く環境を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することを目指す。」と述べられている。

(中略)

後半部分では旧学習指導要領の目標に加えて、学びに向かう力や人間性等の育成にも言及されており、「地球や地球を取り巻く環境に対して主体的に関わり、それらに対する気付きから課題を設定し解決しようとする態度を養う」と述べられている。ここでは、主体的に課題に取り組む態度の例として、「自然環境の保全に寄与する態度」、「自然の事物・現象を総合的に考察しようとする態度」などが挙げられている。

(※2023年度新課程研究会分析資料より抜粋)

地学

(2) 2025年度 共通テスト本試験分析

2021年度から実施されている共通テストで、第1問は地学の全範囲にまたがる総合問題の出題が続いている。しかし、新課程へ完全移行した今年度の共通テストのその他の問題は、「思考力・判断力・表現力」が必要とされる問題や、思考の過程を問うような探求活動に基づくレポート形式や会話文の問題の増加も見られなかった。また、「思考力・判断力」が必要とされる問題と、「知識力」を問う問題の割合もほぼ変化が見られず、2020年度以前のセンター試験と、同傾向の出題であった。

2025年度共通テスト本試験「地学基礎」「地学」の設問ごとの分析を、河合塾「共通テストリサーチ」データを基に行った。

分析で用いたデータの平均点（データ数）は、

＜地学基礎＞	全体	34.9点 (19,312)	現役生	34.8点 (18,738)	高卒生	38.5点 (574)
＜地学＞	全体	45.2点 (425)	現役生	44.1点 (389)	高卒生	57.4点 (36)

である。

なお、令和7年2月6日に大学入試センターが発表した平均点は、地学基礎34.49点、地学41.64点であった。

地 学

(3)ー1 2025年度 共通テスト本試験『地学基礎』分析

■特徴的な問題

【2025年度 共通テスト本試験 「地学基礎」 第3問 B 問3 解答番号112】

中学理科で学習した内容を含む知識問題

図で示された銀河系の形状から、太陽系の位置と、地球から観察した円盤部の見え方を問う知識問題である。銀河系については、一部の地学基礎の教科書にはほとんど記載がないが、中学理科で学習する項目になっている。高校の教科書に記載がなくても中学理科の学習項目であれば出題される可能性があるため、関連する分野に関しては中学の履修範囲を確認し、指導する必要がある。正答率は71.4%。

問 3 次の文章中の **オ** ・ **カ** に入れる記号と語の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 **112**

次の図1は私たちが住む銀河系を真横から見た模式図である。恒星が多く分布するのは、中央の膨らんだバルジと呼ばれる部分とそれを取り囲む円盤状の部分である。私たちの太陽系は、図中の **オ** に位置しているため、銀河系は地球の夜空に **カ** に見える。

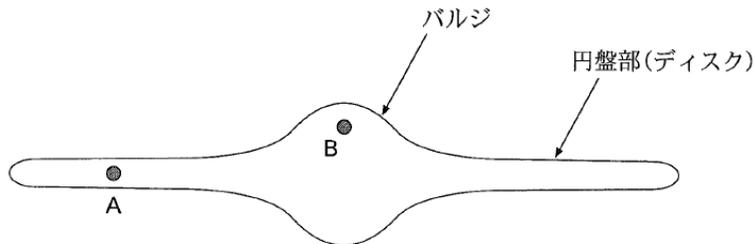


図1 銀河系を真横から見た模式図

	オ	カ
①	A	帯 状
②	A	渦巻き状
③	B	帯 状
④	B	渦巻き状

地学

(3)ー2 2025年度 共通テスト本試験『地学基礎』分析

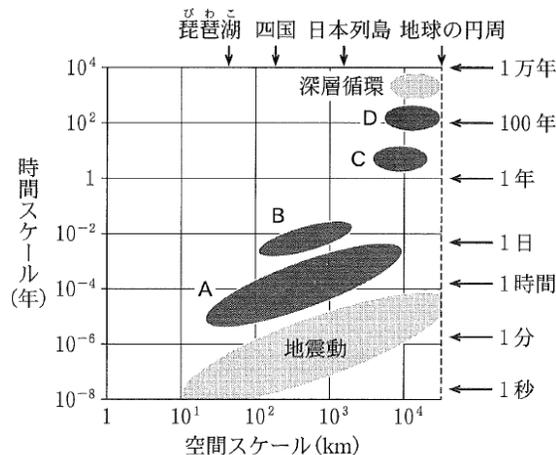
■特徴的な問題

【2025年度 共通テスト本試験 「地学基礎」 第4問 問1 解答番号113】

地学現象のスケールを問う考察問題

地球環境の分野に新たに加わった事項に関する出題である。地学現象の時間・空間スケールの関係を示したグラフは、すべての地学基礎の教科書には掲載されていないが、本問では「地震動」と「深層循環」が例示され、解きやすくするための配慮があり、正答率は70.0%と高かった。この出題形式は、選択肢に与えられた用語以外にも、「造山運動」や「氷期・間氷期のサイクル」などさまざまな地学現象についての出題が可能であるため、今後も出題される可能性が高いと考えられる。

問1 次の図1は、自然または人為的な要因で生じる現象について、それぞれの継続時間と影響範囲を考慮した時間・空間スケールを模式的に示したものである。災害を引き起こす現象A～Dの名称の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 113



	A	B	C	D
①	台風	津波	エルニーニョ現象	人為起源の地球温暖化
②	台風	津波	人為起源の地球温暖化	エルニーニョ現象
③	津波	台風	エルニーニョ現象	人為起源の地球温暖化
④	津波	台風	人為起源の地球温暖化	エルニーニョ現象

図1 自然現象や人為起源の現象の時間・空間スケールの模式図

地学

(4) 2025年度 共通テスト本試験『地学』分析

■正答率が低かった問題

【2025年度 共通テスト本試験「地学」 第3問 B 問3 解答番号12】

地質図を読み取る考察問題

地質構造をとらえるための基本となる走向・傾斜や地質現象の時期を読み取る頻出問題である。等高線と地層境界線の関係もとらえやすく、示準化石も頻出のものであるにもかかわらず、正答率は20.0%と低かった。地質図の問題は、走向線を引いて断面図を作成するなどの実習を行い、過去問などを利用して演習を繰り返せば得点源にすることは難しくない。

次の図1は、ある地域の地質図である。この地域に分布する地層A～Dの走向・傾斜は同じで一定である。また、地層BとCの厚さもそれぞれ一定である。地層Dの泥岩層からはピカリアの化石が産出し、地層Eの礫岩層の最下部に、300万年前の放射性年代(数値年代)を示す凝灰岩層が挟まれる。また、この地域には、断層Fと火成岩の岩脈Gが認められるが、地層の逆転や褶曲はない。

問3 前ページの図1の地層A～Dの走向、断層Fの断層面の傾斜、および断層Fの活動時期の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。 12

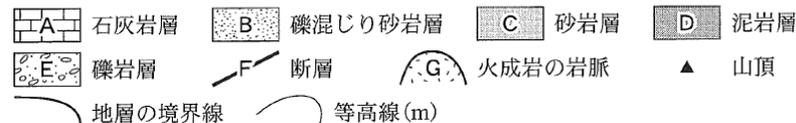
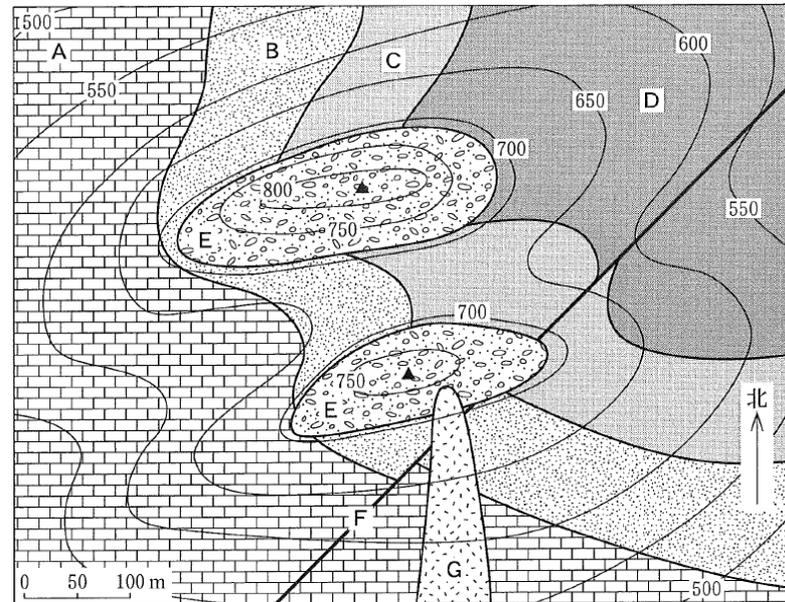


図1 ある地域の地質図

	地層の走向	断層面の傾斜	断層の活動時期
①	N 40° E	90°	新第三紀
②	N 40° E	90°	第四紀
③	N 40° E	60°	新第三紀
④	N 40° E	60°	第四紀
⑤	N 40° W	90°	新第三紀
⑥	N 40° W	90°	第四紀
⑦	N 40° W	60°	新第三紀
⑧	N 40° W	60°	第四紀

地 学

(5) 指導のポイント

■ 学習対策－今後の指導－ ■

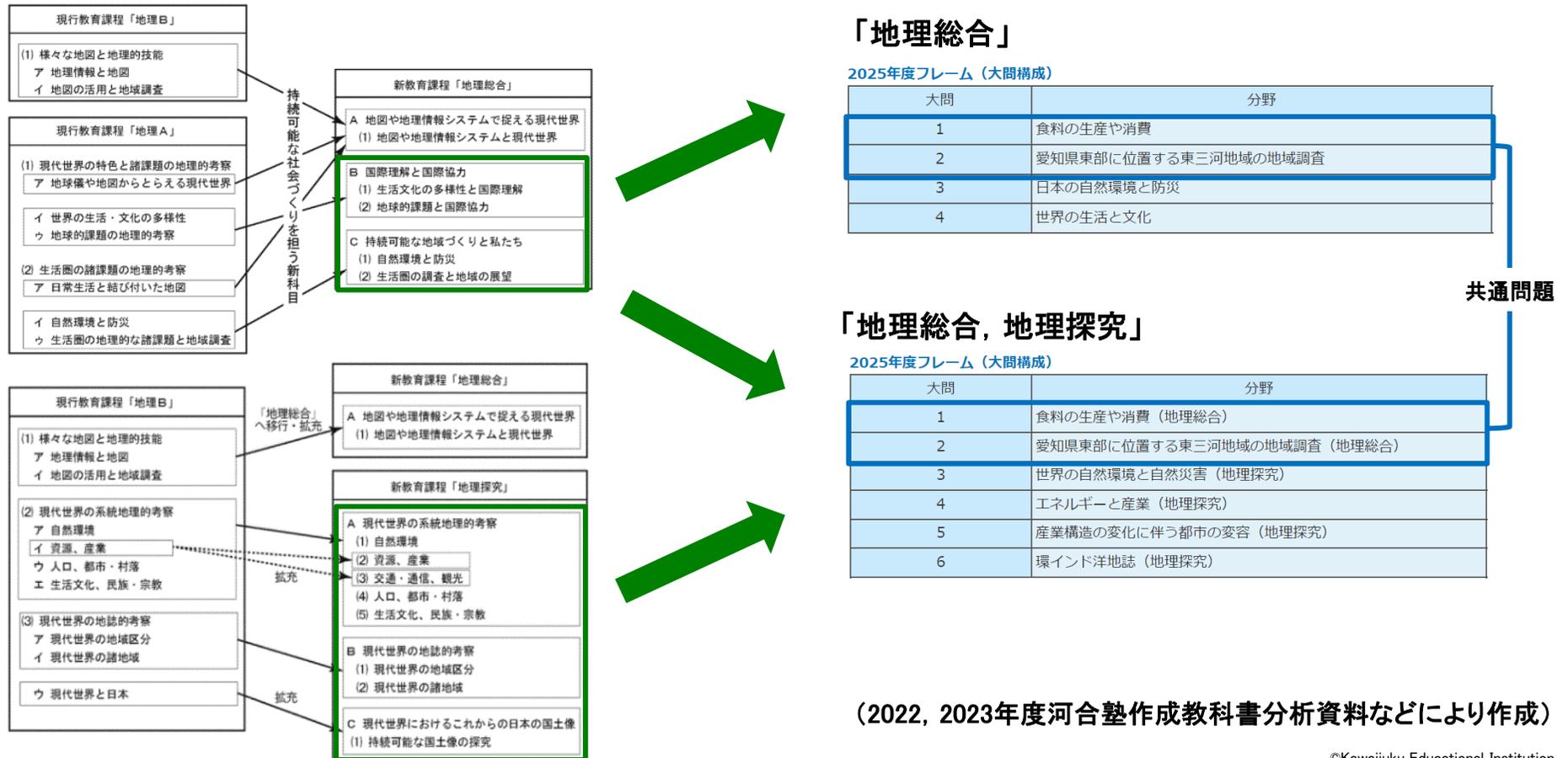
- (1) 図を読み取る力に加えて、グラフ用紙などを用いた作図する力、および結果を考察する力が必要。
→教科書の実習や探究に注目し、自ら図やグラフなどを描く練習を行い、結果および考察をレポートの形式でまとめる練習を行う。
- (2) 中学理科での学習事項にも注意を払う。
→高校の教科書に記載がない用語や内容であっても、中学理科で扱われた学習項目であれば出題される可能性があるため、指導上の注意が必要(例 銀河系の構造など)。

地理総合, 地理探究

(1) - 1 共通テスト分析(学習指導要領と出題フレームとの関係)

新課程「地理総合」、「地理探究」は、旧課程から項目再編があったものの学習内容の違いは小さい。2025年1月の大学入学共通テストの出題フレームをみると、センター試験や旧課程下の共通テストと同様に、まんべんなく出題されており、「地理総合」と「地理総合, 地理探究」の共通問題は第1問, 第2問であった。

旧教育課程, 新教育課程の学習項目の関係と2025年度大学入学共通テスト本試験「地理総合」、「地理総合, 地理探究」の出題フレーム



地理総合, 地理探究

(1) - 2 共通テスト分析(正答率が低かった特徴的な設問①)

■正答率が低かった特徴的な設問①

【2025年度大学入学共通テスト「地理総合, 地理探究」第1問 問2(「地理総合」との共通問題)】

基本的な知識の定着, 読図などの地理的技能の向上が課題

自然環境と農業に関する基本的な知識と読図などの地理的技能をもとに, 多面的・多角的に考察できるかが問われた(正答は①, 正答率:46%)。②の「アブラヤシ」は, 東南アジアが主産地の熱帯雨林気候が好適な作物であり, イには当てはまらないが, 誤答のうち②の選択率が約29%と最も高かった。

問 2 次の図 2 中の地点ア～エの周辺における自然環境と農業の特徴について述べ

た文として最も適当なものを, 後の①～④のうちから一つ選べ。 2

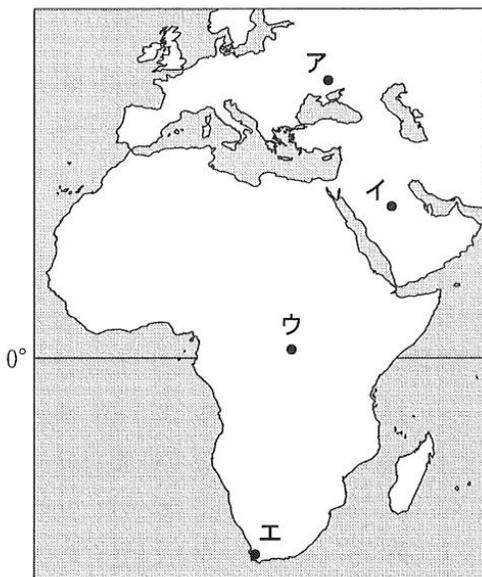


図 2

- ① アの周辺は, 降水量の季節変化が少ない冷涼な気候であり, 肥沃な土壌をいかして小麦などが栽培されている。
- ② イの周辺は, 1年中乾燥する気候であり, オアシスや灌漑施設かんがいを利用してアブラヤシなどが栽培されている。
- ③ ウの周辺は, 雨季と乾季が明瞭な高温の気候であり, 焼畑によりキャッサバなどが栽培されている。
- ④ エの周辺は, 冬より夏の降水量が多い温暖な気候であり, ブドウなどが栽培されている。

地理総合, 地理探究

(1) - 3 共通テスト分析(正答率が低かった特徴的な設問②)

■正答率が低かった特徴的な設問②

【2025年度大学入学共通テスト「地理総合, 地理探究」第2問 問3(「地理総合」との共通問題)】

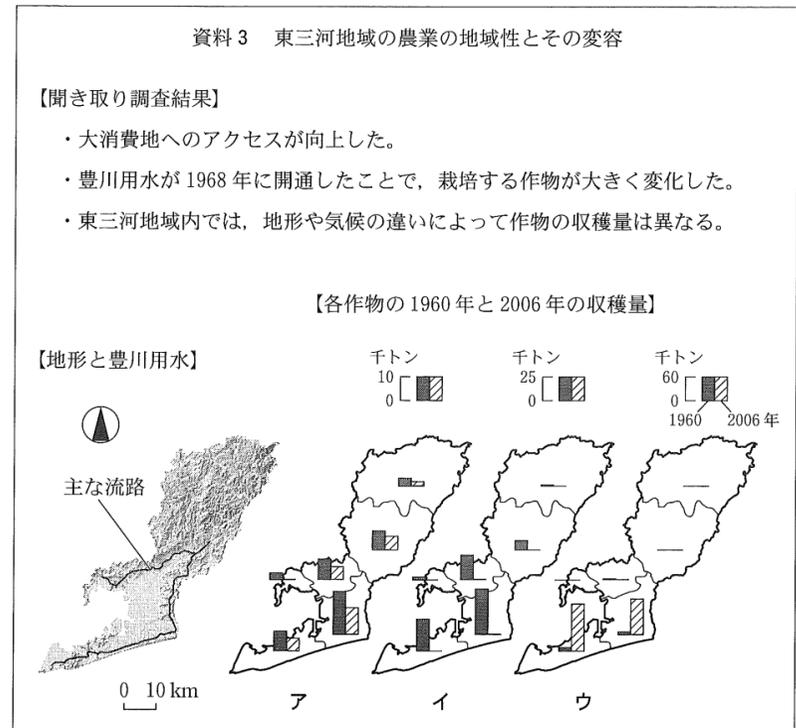
資料を読み解く力の育成と中学校社会科地理的分野の学習内容の定着が課題

東三河地域の農業の変化(キャベツ・米・サツマイモ)について問われた(正答は⑤, 正答率:24%)。日本において主食の米は, 地域にかかわらず栽培される作物(ア)である一方, 園芸農業が盛んな東三河地域(渥美半島)において, 豊川用水の開通もあり, 付加価値の高いキャベツの栽培がはじまり(ウ), 主産地化され全国的にも有名となった。受験生の約半数がキャベツと米を取り違えた。

問3 レオンさんは, 東三河地域の農業がなぜ盛んになったのかを探るため, 農家への聞き取り調査結果と, 地元の図書館で調べた統計などを次の資料3にまとめた。資料3中のア~ウは, キャベツ, 米, サツマイモのいずれかについて, 1960年と2006年の収穫量を行政区別*に示したものである。作物名とア~ウとの正しい組合せを, 後の①~⑥のうちから一つ選べ。 7

*2020年時点。

	①	②	③	④	⑤	⑥
キャベツ	ア	ア	イ	イ	ウ	ウ
米	イ	ウ	ア	ウ	ア	イ
サツマイモ	ウ	イ	ウ	ア	イ	ア



『愛知農林水産統計年報』などにより作成。

地理総合，地理探究

(2) 課題と指導のポイント

■課題■

- 基本的な知識の定着，読図などの地理的技能の向上
- 中学校社会科地理的分野の学習内容の定着
- 資料を読み解く力を育むこと

2025年度大学入学共通テスト「地理総合，地理探究」の各小問の選択率をみると，基本的な知識が定着していないことに起因する誤りが例年に比べ多い。



■学習対策—今後の指導—■

- (1) 共通テスト対策であれ，二次・私大の個別入試対策であれ，受験対策として膨大な知識が必要であるため大量の暗記から逃れることはできない。しかし，単純な暗記ではなく，中学校で学んだ内容も踏まえて「なぜそうなるか」を意識して，事象や事項を理解した上で知識を涵養していく姿勢を育てていくことが重要である。探究型の授業も導入しながら興味関心を惹きつけて指導を進めていく必要がある。
- (2) 従来から図表が多用される試験問題が一般的であり，知識をもとに思考し判断することが求められている。比較的単純な形式であったセンター試験時代の過去問を端緒として演習をはじめ，共通テストの過去問へアプローチする学習方法が重要である。その際，どのように考えたか思考の過程を「言語化」し，メモ書きするなどして可視化しておくこと，再現性が高まり学習効果がより大きくなる。

歴史総合, 日本史探究

(1) - 1 大学入学共通テスト分析

- ・新課程の新科目である「歴史総合, 日本史探究」初の共通テスト。
- ・歴史総合は第1問、日本史探究は第2～6問(試作問題と同様)。
- ・学習指導要領で強調されている「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に着目
諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめ(知識及び技能)、
事象同士を因果関係などで関連付けて考察し(思考力、判断力)、自分の考えを論理的に
説明する力(表現力)を育成することを目標としている。

■形式上の比較(ページ数は白紙除く)

	2024年『日本史B』本試	『歴総, 日探』試作問題	2025年『歴総, 日探』本試
大問数	6題	6題	6題
小問数	32問	34問	33問
ページ数	30ページ	39ページ	33ページ

- ・日本史は、センター試験・共通テストともに、新課程導入や制度変更などが行われる際、移行前から新傾向を先取りする傾向が強い。
→日本史Bでも、共通テストに移行後、資料・会話などを多用した問題がすでに多く出題
- ・**2025年の傾向**…試作問題の方向性を引き継ぎ、すべての大問で高校生が登場する場面設定(資料収集、調べ学習、ワークシート、資料をまとめたメモ・パネルの作成)で、生徒の主体的な取り組みが扱われたほか、**背景や因果関係などを問う問題**が多く見られた。

歴史総合, 日本史探究

(1) - 2 大学入学共通テスト分析

■特徴的な問題

【2025年度大学入学共通テスト本試験 「歴史総合, 日本史探究」 第3問 問3】

設問文から条件を確認し、文献資料を知識と合わせて読み解いていく問題

本問は設問文から渤海のことを「高麗」と記す資料として最も最適なものを判断させている。受験生は、まず渤海が存在した時代を想起し、次にその時代とは合致しない資料を排除していく必要がある。知識と歴史的思考力・判断力が必要で、総合的な学力が求められている設問といえる。(正解②)

問 3 下線部◎に関連して、渤海を「高麗」と記す資料があることに関心を持った二人は、「高麗」という記述がある資料を集めた。資料1～4のうち、渤海のことを「高麗」と記す資料として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 16

資料1

天皇が右大臣に大宰府の文書と高麗国の外交文書を示した。公卿たちが議論した結果は、「返事をしてはならない。また、要害を警固し、祈禱を行う。」ということだ。ただしこの外交文書は高麗のものではないようだ。もしかすると宋の謀略か。

資料2

高麗の使者の外交文書には、「高麗国王の^{だいしんも}大欽茂が申し上げます。日本では聖武天皇が亡くなったとお聞きしました。そこで使者を遣わして、上表文と恒例の貢物を持たせて入朝させます。」とあった。

資料3

高麗の使者は、「隋の煬帝は、三十万の軍を送ってわが国を攻めましたが、逆にわが軍によって破られました。その時の捕虜や武器、国の産物などをたてまつります。」と述べた。

資料4

^{なにわのくすし}難波薬師奈良らは、「私たちの先祖である^{とくらい}徳来はもと高麗人でしたが、百済国の人となりました。昔、雄略天皇が百済に技術者を求めた際、徳来を日本におくりました。」と述べた。

① 資料1 ② 資料2 ③ 資料3 ④ 資料4

歴史総合, 日本史探究

(1) - 3 大学入学共通テスト分析

■ 正答状況からみた考察

【2025年度大学入学共通テスト本試験 「歴史総合, 日本史探究」 第6問 問4】

戦後史は要注意！知識を軽視してはいけない！

全33問中、最も正答率が低かった(27%)。下線部⑥は「占領期」であり、第二次世界大戦後を扱った設問。形式・内容とも共通テストらしくない、旧センター試験でもみられたような問題であるが正答率は最も低かった。誤答は②が最も多かった(35%)が、これは芦田均内閣の時期が分からなかったということか。理由はともかく、戦後史学習が不十分であることを示している。早い段階から全時代・全分野からの出題であることを意識し、計画的な学習を心がける必要がある。

問4 松本清張の年譜中の下線部⑥における出来事に関して述べた文として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 32

- ① 官公庁の労働者を中心にゼネラルストライキ(ゼネスト)が計画されたが、実施直前に中止された。
- ② 芦田均が中道連立内閣を組織したが、疑獄事件をきっかけに退陣した。
- ③ 国鉄をめぐる下山事件などが続発し、労働組合に嫌疑がかけられた。
- ④ 吉田茂内閣は、破壊活動防止法を制定して治安体制を強化しようとした。

設問番号	正答率	マーク率			
		①	②	③	④
問4	27.3	12.4	35.0	24.3	27.3

正答

※数値は、河合塾「共通テストリサーチ」より

歴史総合, 日本史探究

(2) 課題と指導のポイント

■ 大学入学共通テスト本試験から分かる傾向と入試で求められる力 ■

- 「歴史総合」で問われた、世界史分野の問題の対策が必要
- 時間軸・空間軸を意識した問題が出題される → 時代概観をつかんでいるかどうか問われる
- 資料や図版から情報を読み取って、教科書的な知識と合わせて正答を導く問題が出題される



■ 学習対策－今後の指導－ ■

(1) 「歴史総合」では横軸(同時代史な関連)を重視

歴史総合では、日本の歴史に加え、複数の国にまたがる世界の歴史を、横のつながりを意識して学習する必要がある。巨視的な視点を持った指導が重要。

(2) 資料・図版・地図などを活用した指導

教科書に掲載された史資料を見せるだけでなく、考察・議論を経て、史実や論点を掘り下げることが重要。授業内でディスカッションの場を設けることも有効。

歴史総合, 世界史探究

(1) - 1 共通テスト分析

- ・新課程の新科目である「歴史総合, 世界史探究」にとって、初の共通テスト。
- ・歴史総合は第1問、世界史探究は第2～5問(試作問題と同様)。
- ・学習指導要領で強調する、「知識及び技能」「思考力、判断力」を活用して解く問題が中心。
 - ・「知識」 ……歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について理解すること
 - ・「技能」 ……諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる力
 - ・「思考力、判断力」……事象同士を因果関係などで関連付けて考察する力

・形式上の比較(ページ数は白紙除く)

	2024年『世界史B』本試	『歴総, 世探』試作問題	2025年『歴総, 世探』本試
大問数	4題	5題	5題
小問数	33問	33問	32問
ページ数	32ページ	40ページ	34ページ

- ・世界史は、センター試験・共通テストともに、新課程導入や制度変更などが行われる際、移行前から新傾向を先取りする傾向が強い
→共通テスト移行後、世界史Bでも資料・会話などを多用した問題がすでに多く出題
- ・2025年の傾向…試作問題と同様、4題は高校の授業という場面設定で、そのすべてで班別学習の準備(資料収集、調べ学習、資料をまとめたメモ・パネルの作成)など生徒の主体的な取り組みが扱われた。(残りの1題は、資料を適切に活用するための、資料の持つ文脈・背景に関連する問題。)
設問では、背景や因果関係などを問う問題が多く見られた。

歴史総合, 世界史探究

(1) - 2 共通テスト分析: 歴史総合(第1問)

■ 正答率が低かった特徴的な問題①【2025年度共通テスト「歴史総合, 世界史探究」第1問 問5】

パネルから読み取れることや、背景についての正誤判定問題。

時間軸と空間軸が理解できているか、世界と日本の歴史のつながりが理解できているかが問われている。

歴史総合の中で一番正答率が低かった問題。①は日本史、②は空間軸(東アジアの「独立国、植民地、租界」とはどこか)、③④は時間軸(「1920～30年代」という時期の感覚)の問題である。正答は②(正答率: 41.5%)。

③を選んだ受験生が多く(マーク率: 36.2%)、統監府と総督府の違いが分かっていなかったことになる。また、租界についての知識が不足していたことも、②が選択できなかった理由だろう。つまり、点差が付いたのは知識の有無!

1班は、1920～1930年代の東アジアの女性の装いについて調べ、パネル1を作成した。パネル1から読み取れることや、その背景について述べた文として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

パネル1

- ・欧米の最新の装いや髪型を模倣した女性は、1920年代後半の東京や大阪で、モダンガールと呼ばれた。
- ・大衆化の進展に伴い、1930年代の京城や上海、天津などでも、モダンガールの装いが見られた。
- ・上海で1931～1937年に発行された女性誌『玲瓏』^{れいろう}では、モダンガールが表紙を飾ることもあった。

- ① 日本のモダンガールと呼ばれた女性の髪型は、ロングヘアーを特徴としていた。
- ② 東アジアでは、独立国、植民地、租界を問わず、モダンガールの装いが見られた。
- ③ モダンガールが闊歩^{かつぽ}した1930年代の京城には、統監府が設置されていた。
- ④ 『玲瓏』が上海で創刊された当時の中国は、中華人民共和国である。

歴史総合, 世界史探究

(1) - 3 共通テスト分析: 世界史探究(第2~5問)

■ 正答率が低かった特徴的な問題②【2025年度共通テスト「歴史総合, 世界史探究」第3問 問7】

資料の読み取り、資料が書かれた背景についての正誤判定問題。世界史探究で一番正答率が低かった問題。

④⑤⑥の選択者が多く(マーク率:それぞれ41.3%、30.9%、20.9%)、①②③が少ない(それぞれ1.9%、2.7%、2.0%)ことから資料の読み取りはできていたことが分かる。しかし④⑤⑥に選択者が分散し、しかも正答⑥が一番少ない結果となった。スタインが初めて中国に来たのは「8か国連合軍が都を占領した時」、すなわち義和団戦争中の1900~1901年であり、彼の調査は「今日まで30年にわたる」ので、資料4が書かれた時期は1930~31年と判断する。XYZには史実の誤りがないため、時期で判断する必要がある。つまり④⑤⑥に分散し、しかも正答⑥が最少だったのは、**資料4が書かれた時期、あるいはXYZの時期が分からなかった**ことに起因する。つまり**時期についての知識が欠如**している受験生が多いことがわかる。

カニンガムと同様に、外国人として考古学的な調査を行った人物に、スタインがいる。スタインの中央ユーラシアにおける調査実施の許可に関わって残された現地政府の公文書の抜粋(資料4)から読み取れる事柄あ・いと、資料4が書かれた時期の政治的背景に関して述べた文X~Zとについて、最も適当なもの組合せを、後の①~⑥のうちから一つ選べ。 22

資料4

- ・スタイン氏が初めて我が国にやって来たのは、8か国連合軍が都を占領した時であり、外国人は国内で好きなように振る舞うことができた。
- ・今日までの30年にわたるスタイン氏の調査による敦煌文書や仏像の発見は、アジアの古代研究に新時代を開いた。しかし、これらは皆、国家の貴重な宝物である。外国人がこれを研究するのはいいのだが、盗み去ることは不法行為である。

資料4から読み取れる事柄

- あ 現地政府は、外国人による学術調査を奨励し、文化財・遺物を国外において保護する必要がある、と考えていた。
- い 現地政府は、外国人が学術調査を利用して文化財・遺物を国外に持ち出していることを危惧し、それらを自国において保護する必要がある、と考えていた。

資料4が書かれた時期の政治的背景

- X 明治維新に倣って、立憲制を目指した国制改革を進めようとしていた。
- Y 国家主導の下で、改革開放政策が進められていた。
- Z 全国の統一的支配の実現を目指して、北伐が進められていた。

- ① あ—X
- ② あ—Y
- ③ あ—Z
- ④ い—X
- ⑤ い—Y
- ⑥ い—Z

歴史総合, 世界史探究

(2) 課題と指導のポイント

■ 課題 ■

- 知識の底上げ、とくに時間軸・空間軸に関する知識
- 資料や図版から情報を読み取り、教科書的な知識と合わせて正答を導く問題の対策
- 歴史総合で問われる、日本史分野の問題に対する対策



■ 学習対策—今後の指導— ■

- (1) 2025年共通テスト世界史探究は、これまでの共通テスト世界史Bに比べて、さらに基本的な情報に絞り込まれていたが、それは学ぶべき知識が減ったという意味ではない。扱う用語量はかなり減少したが、用語を直接出さずに、出来事の時期・経緯・因果関係・背景・影響など内容を問う問題が増加している。したがって、教科書を徹底的に活用し、理解を深める学習が必要。とくに、空間軸と時間軸の把握は必須。
- (2) 歴史総合の日本史部分の攻略については、18世紀以降の世界史を学習する際、同時期の日本の状態や、世界の動きが日本に与えた影響などを確認するクセをつけさせておくとよい。
- (3) 問題量の多さ、多様な問題形式、資料・図版などの読み取り問題に慣れるため、模試や過去問の活用などを通じて演習量を積極的に確保する必要がある。

公共, 倫理

(1) -1 2025年度大学入学共通テストの分析

新学習指導要領では、養うべき「公民としての資質・能力」として、「公共」「倫理」「政治・経済」に関わる知識・技能、諸資料を読解しまとめる能力、問題を多面的に考察し公正な立場から判断する力、合意形成のために他者と議論する能力、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度などが示されている。

■ 共通テストの出題形式

諸資料を読解しまとめる能力を試す設問や、問題を多面的に考察し判断する力を試す設問、思考実験や課題探究学習の場面を想定した設問などは、旧課程入試と同様、引き続き出題されている。

■ 「公共」の内容の取扱い

2025年度の第1問および第2問は、「公共」からの出題であった。今後も、大問数と設問数は2025年度と同じ程度となることが予想される。知識問題への対処という点においては、旧課程の「現代社会」と大きく異なる対策は必要ないと考えられる。ただし、「現代社会」と比べ、知識問題の分量は少なく、扱われた知識事項も限定的である。2025年度は経済分野の知識事項を扱う設問がなかったことから、今後の共通テストで経済分野の知識事項が扱われるかどうか、注目したい。

■ 「倫理」の内容の取扱い

2025年度の第3問から第6問までは、「倫理」から出題され、その大問数・設問数は、2022年度に発表された試作問題と同様であった。多くは旧課程の「倫理」と同様の対策で対応できるが、新学習指導要領の教科書において扱われることになった「人格、感情、認知、発達についての心理学」に関する学習項目の対策が新たに求められる。2025年度の第5問において、認知の心理学を扱う設問が出題されたように、新学習指導要領の教科書から掲載されるようになった心理学者や学説・用語などは、今後、出題が定着していくことが予想される。

公共, 倫理

(1) - 2 2025年度大学入学共通テストの分析

■大問別概況

問題番号	配点	難易	出題内容	概況	
第1問※	公共	12	やや易	男女共同参画社会をめぐる現状と課題	「公共」の授業での探究活動という場面設定のもと、日本の男女平等に関する法的状況についての問題、示された資料や会話文の内容を読み取る力を試す問題、形式的平等と実質的平等およびアイヌ施策推進法(アイヌ民族支援法)に関する問題が出題された。
第2問※	公共	13	やや易	公共空間の持続的形成	生徒が公共空間の持続的形成に関する課題探究を行うという場面設定のもと、ハーバーマスやアーレントに関する問題、二つの表の内容を読み取る問題、帰納的に推論されている発言を判断する問題、対面と非対面という点に着目して作成されたメモを踏まえて事例を判断する問題が出題された。
第3問	倫理	28	標準	源流思想と西洋思想	芸術をテーマに、源流思想(古代ギリシアの思想、中国の思想、大乘仏教の思想など)と西洋思想(科学革命、ルネサンスなど)の分野から幅広く出題された。
第4問	倫理	15	標準	日本思想	日本における外来思想の受容と展開をテーマとする会話文をもとに、仏教の受容と本地垂迹説、垂加神道、復古神道、親鸞、伊藤仁斎、本居宣長、富永仲基、佐久間象山、夏目漱石、内村鑑三らの思想が取り上げられた。
第5問	倫理	16	やや難	認知の心理学	生徒の会話をもとに、認知の心理学に関する分野から、検索と符号化についての問題やメタ認知とヒューリスティックに関する問題、バイアスに関する問題などが取り上げられた。試作問題で出題された連動型の問題もみられた。
第6問	倫理	16	標準	現代社会の諸課題	戦争と平和というテーマで、現代のヒューマニズムを中心に出题された。フォーコーやストア派に関する知識も扱われた。

※「地理総合／歴史総合／公共」「公共, 政治・経済」と同一問題。

公共, 倫理

(2) -1 共通テスト本試の特徴的な問題

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト本試験「公共, 倫理」第5問・問1】

会話文と資料の内容を読解する力とともに、設問内に示された情報を基に推論する力を試す問題

この設問は、「記憶」に関する三段階(符号化[記銘]、貯蔵[保持]、検索[想起])について、設問内で示された情報も活用しながら推論する力を試している。新学習指導要領の教科書で新たに扱われるようになった心理学に関する学説や用語などは、今後、出題が定着していくと予想される。

場面1 生徒Fと生徒Gが、後の資料を見ながら次の会話をしている。

F: 記憶は、覚えていることだけを指すものじゃないだね。

G: うん、心理学の本によると、記憶には、覚えるという[符号化(記銘)]、覚えておく[貯蔵(保持)]、覚えたことを思い出す[検索(想起)]、この三つの段階があるんだって。ちょっと、この資料を見てくれる? これは、に保持されている、言葉の意味についての情報が、の段階で図形の記憶に影響することを示そうとした実験なんだ。

F: へえ、記憶はもっと単純なものだと思っていたけど、実験の結果を見ると、言葉が表すものに引きずられて[記憶の変容]が起きることがわかるね。

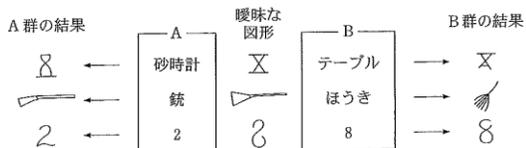
問1 前の資料を読み、会話文中の空欄・に入る語句の組合せとして最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。

- ① ア 短期記憶 イ 符号化(記銘)
 ② ア 短期記憶 イ 検索(想起)
 ③ ア 長期記憶 イ 符号化(記銘)
 ④ ア 長期記憶 イ 検索(想起)

資料

この実験では、参加者に下図中央のような曖昧な図形を1枚ずつ順に提示した。提示前には「次の図形は〇〇に似ています」と口頭で伝え、A群の参加者にはAの枠内、B群の参加者にはBの枠内の語を〇〇に入れた。すべての図形を提示した後、参加者はできるだけ正確に図形を思い出して描いた。

この実験で参加者が描いた図形の一例が下図の左端と右端である。



※実際の実験では、曖昧な図形を12枚提示している。

公共, 倫理

(2) -2 共通テスト本試の特徴的な問題

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト本試験「公共, 倫理」第5問・問5】

これまでの共通テスト「倫理」では見られなかった、連動型の設問形式

2022年度に発表された試作問題に見られた連動型の設問形式は、これまでの共通テスト「倫理」には見られなかった形式であり、本試験では2025年度に初めて出題された。「ある問題をめぐって、その対処法として何がふさわしいか」を判断する力が求められる。問題を多面的に考察したり議論したりする機会を設けるなど、思考力・判断力を磨くことが有効。

問5 下線部◎に関連して、例えば、避難が必要とされる異常事態が発生しても、まだ正常の範囲内だと考える認知バイアスが働くことで、対応の誤りや遅れが生じることが知られている。このような問題に対して社会の環境整備をする場合の二つの方向性と具体的な対処法について、次の(1)・(2)の問いに答えよ。

(1) 問題対処の方針として、どのような方向性を重視するかによって具体的な対処法の選択は変わってくる。まず、あなたが重視する環境整備の方向性を、次の①と②のうちから一つ選べ。なお、(1)で①と②のいずれを選んでも、(2)の問いについては、それぞれに対応する適当な選択肢がある。

27

- ① 認知バイアスの影響をできるだけ抑えた判断を個々人に促す環境を整える
- ② 認知バイアスが判断に影響してもできるだけ問題が生じない環境を整える

(2) 次に、(1)で選んだ環境整備の方向性から導かれる具体的な対処法として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。 28

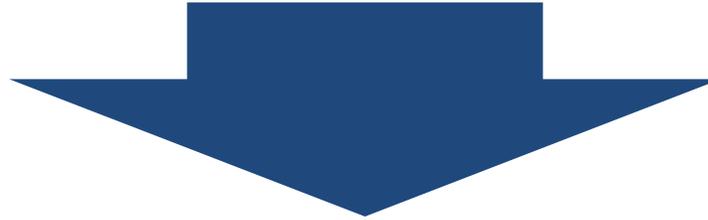
- ① 避難時に、直感に基づいてそれぞれが行動できるように、様々な異常事態の発生メカニズムに関して知識の普及を図る。
- ② 避難時に、自分の判断が間違っていないかを検討できるように、国や地方自治体が発信する公的な情報の利用を容易にする。
- ③ 避難行動を指揮する地域のリーダーを輪番制で決めておき、非常時にそのリーダーに従って行動できるようにする。
- ④ 安心して避難生活を過ごせるように、十分な人数を収容できる避難所を各地に設置したり、非常食を備蓄したりする。
- ⑤ 直ちに適切な避難行動がとれるように、異常事態が発生した際に、人が危険と感じる警戒色や警告音を提示する。
- ⑥ 避難時に、お年寄りや身体が不自由な人が取り残されないように、地域の包括的な支援・サービス提供体制を整える。

公共, 倫理

(3) 課題と指導のポイント

■課題—求められる力—■

- 知識の習得・定着と活用
- 諸資料(グラフ、引用文、会話文など)を読み解く力
- 問題を多面的に考察し判断したり整理したりする力



■学習対策—今後の指導—■

- (1) 教科書に掲載されている諸資料について分析・考察を行う経験を積ませることが重要。
授業内でディスカッションの場を設け、問題を多面的に考察・議論させることも有効。
- (2) 「公共」は、初見問題への対応力を磨くことが重要。
「倫理」は、知識の習得・定着に重きを置きつつも、原典資料に触れさせる機会を設けたい。
また、獲得した知識を別角度から活用する工夫も必要。

公共、政治・経済

(1)－1 2025年度大学入学共通テストの分析

新学習指導要領では、養うべき「公民としての資質・能力」として、「公共」「倫理」「政治・経済」に関わる知識・技能、諸資料を読解しまとめる能力、問題を多面的に考察し公正な立場から判断する力、合意形成のために他者と議論する能力、現代の諸課題を主体的に解決しようとする態度などが示されている。

■ 共通テストの出題形式

諸資料を読解しまとめる能力を試す設問や、問題を多面的に考察し判断する力を試す設問、思考実験や課題探究学習の場面を想定した設問などは、旧課程入試と同様、引き続き出題されている。

■ 「公共」の内容の取扱い

2025年度の第1問および第2問は、「公共」からの出題であった。今後も、大問数と設問数は2025年度と同じ程度となることが予想される。知識問題への対処という点においては、旧課程の「現代社会」と大きく異なる対策は必要ないと考えられる。ただし、「現代社会」と比べ、知識問題の分量は少なく、扱われた知識事項も限定的である。2025年度は経済分野の知識事項を扱う設問がなかったことから、今後の共通テストで経済分野の知識事項が扱われるかどうか、注目したい。

■ 「政治・経済」の内容の取扱い

2025年度の第3問から第6問までは、「政治・経済」から出題され、その設問数・大問数は、2022年度に発表された試作問題と同様であった。新学習指導要領の教科書に登場する知識事項は、旧学習指導要領において扱われた知識事項と合致する部分が多い。時代や社会の変化に合わせて扱う知識項目の内容が変わることはあるだろうが、扱う知識項目が劇的に変化したわけではない。時代や社会の変化に合わせて出題の変化はあるかもしれないが、知識問題への対処という点においては、これまでと大きく異なる対策をとる必要はないと考えられる。

公共, 政治・経済

(1) - 2 2025年度大学入学共通テストの分析

■大問別概況

問題番号	配点	難易	出題内容	概況	
第1問※	公共	12	やや易	男女共同参画社会をめぐる現状と課題	「公共」の授業での探究活動という場面設定のもと、日本の男女平等に関する法的状況についての問題、示された資料や会話文の内容を読み取る力を試す問題、形式的平等と実質的平等およびアイヌ施策推進法(アイヌ民族支援法)に関する問題が出題された。
第2問※	公共	13	やや易	公共空間の持続的形成	生徒が公共空間の持続的形成に関する課題探究を行うという場面設定のもと、ハーバーマスやアーレントに関する問題、二つの表の内容を読み取る問題、帰納的に推論されている発言を判断する問題、対面と非対面という点に着目して作成されたメモを踏まえて事例を判断する問題が出題された。
第3問	政経	18	標準	地域社会の課題	生徒自身の将来や地域社会の課題というテーマに関連して、物価と失業率に関する資料を使った問題、食料安全保障や地産地消に関する問題、「ふるさと納税」に関する問題などが出題された。
第4問	政経	19	標準	国際政治経済のあり方	国際政治経済のあり方にかかわる出来事に関連して、6か国の貿易収支と一人当たりGDPとの推移に関するグラフを使った問題、国連安保理の常任理事国の拒否権行使を制約する仕組みについて考える問題、「アラブの春」に対する世論調査の結果を用いた問題などが出題された。
第5問	政経	19	標準	労働と貧困問題	諸外国の労働問題に関する会話文をもとに、格差や貧困に関する語句や指標についての問題、契約自由の原則の修正を題材にした問題、4か国の労働組合組織率と労働生産性に関する資料を使った問題、日本的な雇用関係についての問題などが出題された。
第6問	政経	19	標準	企業の新規参入	「経済を活性化させるための企業の新規参入の促進」というテーマのもと、現代の企業に関する問題、需要供給曲線を用いた問題、農業への企業の参入に関する資料を使った問題などが出題された。

※「地理総合／歴史総合／公共」「公共, 政治・倫理」と同一問題。

公共, 政治・経済

(2) 共通テスト本試の特徴的な問題

■特徴的な問題

【2025年度共通テスト本試験「公共, 政治・経済」第4問・問5】

知識とともに読解力・判断力を必要とする問題

この設問では、国際連合(国連)の安全保障理事会や総会についての知識とともに、設問に示された「記事」の内容を読み取って判断を下す力も試されている。部分的に知識を問い、部分的に読解力を試す問題は、今後の共通テストにおいても出題が続くことが予想される。正しい知識の習得とともに読解力を磨くことも重要である。

問 5 下線部◎について、生徒Xと生徒Yは、安保理の常任理事国による拒否権行使を制約する仕組みが必要だと考えた。そこで、新聞のデータベースで過去の試みを調べたところ、次の記事をみつけた。この記事で報じられている決議に関する説明として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

19

安保理常任理事国の拒否権に説明を求める 国連総会が決議採択

国連総会は26日、安全保障理事会で常任理事国が決議の採択に反対した場合、総会の場で説明を求める決議を採択した。ウクライナ侵攻をめぐる安保理での審議で改めて問題となった拒否権の乱用を抑制することが意図されている。拒否権を持つ安保理常任理事国5カ国のうち米英仏、原案を作成したりヒテンシュタインなど82カ国が共同提案した。同決議は、拒否権が行使された場合には、10日以内に国連総会議長が総会を招集し、安保理での決議案の対象とされた事態について討議することを定めた。その際、拒否権を行使した国がまず壇上に立ち、発言することが予定されている。

(2022年4月27日夕刊)

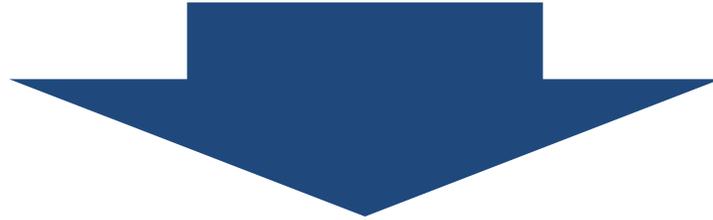
- ① この決議は、総会が上位機関として安保理を管理監督する権限を国連憲章によって与えられていることを確認し、その権限の行使として総会が安保理の活動に制限をかけるものとして採択されたものである。
- ② この決議は、安保理が積極的に対応する必要がないと考えた場合であっても、総会が必要と判断した場合には安保理による強制措置の発動を義務づける仕組みを導入しようとしたものである。
- ③ この決議は、国際の平和と安全の維持について安保理が有する権限を尊重しつつ、国連憲章が扱う問題全般に及ぶ総会自身の権限に基づいて拒否権の行使をとくに取り上げ、討議の対象とすることとしたものである。
- ④ この決議は、総会が「平和のための結集」決議に基づいて、総会として強制措置を加盟国に命じるべきかを判断するために、安保理での審議状況について、とくに常任理事国から説明を受けることとしたものである。

公共, 政治・経済

(3) 課題と指導のポイント

■課題—求められる力—■

- 知識の習得・定着と活用
- 諸資料(グラフ、引用文、会話文など)を読み解く力
- 問題を多面的に考察し判断したり整理したりする力



■学習対策—今後の指導—■

- (1) 教科書に掲載されている諸資料について分析・考察を行う経験を積ませることが重要。
授業内でディスカッションの場を設け、問題を多面的に考察・議論させることも有効。
- (2) 「公共」は、初見問題への対応力を磨くことが重要。
「政治・経済」は、知識の習得・定着に重きを置きつつも、さまざまな資料に触れさせる機会を設けたい。
また、獲得した知識を別角度から活用する工夫も必要。

情報 I

(1)ー1 共通テスト分析 ー 全体

情報の科学的理解に基づいて問題の発見や解決に取り組む思考力・判断力が問われた。

試作問題と概ね同じ傾向であり、情報 I の全範囲から幅広く出題された。学校生活、日常生活において問題を発見し、解決する思考力や判断力が求められる問題が中心であった。

難易度

問題文で与えられた多くの設定や条件をすみやかに扱うことが求められたが、教科書にある知識をもとに考察することで解ける問題がほとんどであり、試作問題と同程度であった。

出題分量

試作問題と概ね同じ分量であるが、マーク数は3増えて51となり、全体として60分の試験時間に対し負担を感じた受験生もいたと思われる。

出題傾向分析

情報 I の全範囲から幅広く出題された。学んだ事柄を問題の発見や解決に活用する思考力や判断力を必要とする問題が多くみられた。正しい知識を身につけることに加え、それを普段の生活の中で活用する力が必要となる。

2025年度フレーム(大問構成)

大問	分野	配点	マーク数	テーマ
1	1) 情報通信ネットワークとデータの活用	20	2	情報セキュリティ, 情報通信ネットワークの仕組みと役割
	2) コミュニケーションと情報デザイン		4	情報のデジタル化
	3) 情報通信ネットワークとデータの活用		2	情報システムとそのサービス, データの蓄積と管理
	4) コミュニケーションと情報デザイン		3	情報デザインの考え方を活かしたユーザインタフェース
2	A) 情報通信ネットワークとデータの活用	30	9	データの収集と管理, 情報システムとそのサービス, 問題の発見と解決
	B) コンピュータとプログラミング		7	モデル化とシミュレーション
3	コンピュータとプログラミング	25	12	アルゴリズム, 変数, 配列, 条件分岐, 反復
4	情報通信ネットワークとデータの活用	25	12	データの表現, データの収集と管理, データの分析と評価
合計		100	51	

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 全体平均点・得点率

【受験(集計)人数・平均点】

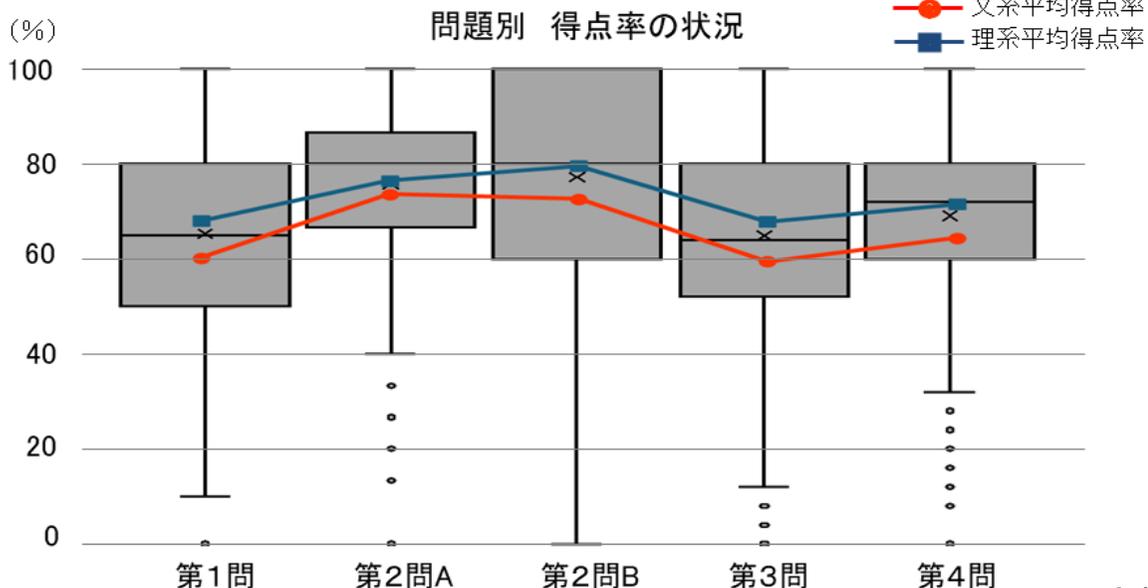
*1 令和7年2月6日 大学入試センター公表の受験人数・平均点

*2 河合塾「共通テストリサーチ」より。共通テスト受験者の約9割が参加。このうち、設問別解答状況の回答があったものを集計。(以下同様)

情報 I		受験(集計)人数			平均点			標準偏差
		全体	高3	高卒	全体	高3	高卒	
大学入試センター公表 *1		279,718	---	---	69.26	---	---	16.09
自己採点 集計結果 *2	全体	116,719	112,281	4,438	69.53	69.12	79.13	15.54
	うち 文系志願者	48,403	47,563	840	65.54	65.34	74.44	14.87
	うち 理系志願者	67,507	63,936	3,571	72.45	71.98	79.91	15.55
	うち 文理未設定	809	---	---	65.14	---	---	16.05

【問題別 得点率の状況】

- 最も得点率が低かったのは第1問。特にデジタル署名やIPv6に関する知識を活用する問題、および7セグメントLEDの問題で得点率が低かった。
- 文理差が最も小さかったのは、スーパーマーケットの情報システムを題材とした第2問Aであった。
- シミュレーションを扱った第2問B、プログラムを扱った第3問、データ分析を扱った第4問では、10%弱の文理差がみられた。



情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第2問B】1/2

第2問B 全体

表計算ソフトウェアを用いた、おつりを渡すために用意すべき千円札の枚数に関するシミュレーションをテーマとする問題であった。乱数を用いた標準的な問題である。モデル化からシミュレーション、結果の分析までの体験を実際に行えば解答しやすい。

【平均正答率の状況】

●文理別 データ数

理系志願者(理系)データ数:67,507

文系志願者(文系)データ数:48,403

●学力レベル別 データ数 ※偏差値により学力レベルを分類

上位(偏差値55.0以上)データ数 :38,291

中位(偏差値54.9~45.0)データ数 :44,581

下位(偏差値44.9以下)データ数 :33,847

区分	第2問B 平均正答率(%)					
	コ	サ・シ	ス・セ	ソ	タ	
全体	94.0	82.9	57.2	74.7	77.1	
文理別	文系	91.8	78.6	53.0	69.6	72.6
	理系	95.6	86.0	60.3	78.4	80.4
学力レベル別	上位	99.6	95.2	80.9	91.6	92.4
	中位	98.2	86.3	58.1	77.9	80.2
	下位	82.4	64.6	29.4	51.4	56.1

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

Mさんの手元の千円札の枚数を最初0枚として、シミュレーションをした結果、表1のようになった。

表1 乱数rの値と手元の一万円札、千円札の枚数変化

	乱数rの値	手元の一万円札の枚数	手元の千円札の枚数
初期値		0	0
1人目	8	1	-4
2人目	1	1	2
3人目	6	2	-2
4人目	10	3	-6
5人目	9	?	?
6人目	4	コ	?
7人目	5	?	?
8人目	3	?	-サシ
9人目	7	?	?
10人目	2	?	?

(表の一部を“?”で隠してある)

なお、この表の「手元の千円札の枚数」が負の数の場合、Mさんが渡さなければならないおつりの千円札が、その数の絶対値の枚数分不足していることを意味する。そこでMさんは、「手元の千円札の枚数」の最小値を調べ、その絶対値の枚数の千円札を事前に準備しておけば、おつりに困らないと考えた。この考えによると、今回行った1回のシミュレーションの場合、千円札 セ枚を事前に準備しておけば、一度も千円札が不足することなく集金できることになる。

第2問B 問1(コ~セ)

- ・シミュレーションの手順を理解して、実際にシミュレーションを行うこと(空欄コ~シ)、シミュレーションの結果を問題解決に結びつけること(空欄ス・セ)が問われた。
- ・空欄コ~シは数字をマークする形式で出題され、シミュレーションにおいて精密に計算を行い、値の変化をすべて追跡することが求められた。空欄ス・セは説明文に基づき、シミュレーションの結果(特に、負の枚数)から、問題解決に結びつく値を判断することが求められた。
- ・空欄コ~シの正答率は80%を超えた。一方、空欄ス・セの正答率は60%を切っており、特に学力レベルの下位層では30%を割っていた。

対策ポイント

シミュレーションの手順を理解・設定し、実際に行うこと、得られた結果を問題解決のための判断や仮説の検証などに活用するよう促すことが理想である。

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第2問B】2/2

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

情報 I

問 2 Mさんは、1回のシミュレーション結果では判断できないと考え、このシミュレーションを10,000回行った。図3は、各シミュレーションでの「手元の千円札の枚数」の最小値を横軸に、その回数を縦軸に表したものである。この結果に関する考察として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 ソ

- ① 全員が一万円札で支払うケースはなかった。
 ② 最後まで千円札が不足しなかったのは、全回数の1割以下である。
 ③ 別の乱数を使って10,000回シミュレーションを行っても、最終的な結果のグラフはまったく同じになる。
 ④ 全員が千円札でお金を支払ったケースが1回以上ある。

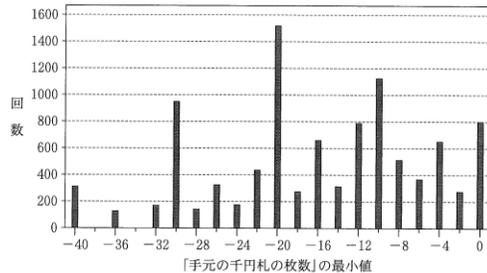


図3 「手元の千円札の枚数」の最小値の回数

第2問B 問2(ソ)

- ・ シミュレーション結果のグラフを分析できるかが問われた。
- ・ 選択肢では各ケースと横軸の値の対応が明示されておらず、これらをシミュレーションの手順に照らして判断することが求められた。シミュレーションの合計回数に占める縦軸の値の割合など、設問文やグラフに基づいて数値を読み取ったり計算したりする必要があった。特に選択肢②については、乱数を用いた確率的モデルのシミュレーションの原理の理解が求められた。
- ・ 正答率は70%を超えているが、文理差は第2問Bの中で最も大きく、9%近くあった。また、学力レベルの上位層と下位層で、正答率の差が40%を超えており、大きな差があった。

対策
ポイント

シミュレーションの結果に基づいてグラフを作成するとともに、グラフを用いてシミュレーションの結果を分析するように促すことが望ましい。その際には、横軸・縦軸の値と、シミュレーションが表す「状況」を結びつけて考える、その数値(目盛)を正確に読み取って計算に利用する、といった点を意識することが重要である。また、確率的シミュレーションの場合、乱数の変化により、シミュレーションの結果は変わりうる、といった基本的な知識に基づき考察することが求められるので、この点についての理解を促すことが望ましい。

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第3問】1/2

第3問 全体

問1はアルゴリズムの理解を問う問題、問2は目的とするアルゴリズムの一部を担うプログラムを作成する問題、問3は目的とするアルゴリズム全体を担うプログラムを作成する問題であった。変数、制御構造、配列に関する理解があれば解ける問題であった。

【平均正答率の状況】

●文理別 データ数

理系志願者(理系)データ数:67,507

文系志願者(文系)データ数:48,403

●学力レベル別 データ数 ※偏差値により学力レベルを分類

上位(偏差値55.0以上)データ数 :38,291

中位(偏差値54.9~45.0)データ数 :44,581

下位(偏差値44.9以下)データ数 :33,847

区分	第3問 平均正答率(%)											
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ
全体	97.3	95.6	93.3	91.1	88.4	94.4	61.1	22.1	52.2	57.2	43.3	39.2
文理別	文系	96.3	94.3	91.2	88.7	85.6	92.5	55.4	15.7	45.0	51.6	31.7
	理系	98.0	96.6	94.7	92.8	90.3	95.8	65.3	26.8	57.4	61.3	44.7
学力レベル別	上位	99.9	99.6	99.5	99.1	98.1	99.7	89.8	48.1	83.6	83.7	75.7
	中位	99.5	98.6	97.6	96.0	93.6	98.2	56.1	12.2	45.3	52.9	26.9
	下位	91.8	87.6	80.7	75.7	70.6	83.7	35.3	6.0	25.8	33.2	14.4

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

Kさんはまず、次の規則(再掲)に従い、いくつかの工芸品がすでに割り当てられた状況で、その次の工芸品の担当部員を表示するプログラムを作ることにした。

最も早く空になる部員(複数の場合はそのうち最小の番号の部員)が、空になった日付から次の工芸品を担当する。

最も早く空になる部員の番号を求めるために、各部員が空になる日付を管理する配列 Akibi を用意する。この配列の添字(1から始まる)は部員の番号であり、要素はその部員が空になる日付である。

例えば、図1の状況では、配列 Akibi は図3のようになる。図1で部員1は5日目に空になるため、図3で要素 Akibi[1] は5となる。同様に要素 Akibi[3] は 7 となる。

日付(日付)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	...
部員1											
部員2	2	4									
部員3			3								

図1 担当図(工芸品4まで)(再掲)

添字	1	2	3
Akibi	5	3	7

図3 図1の状況に対応する配列 Akibi

図3において、要素 Akibi[1] (5) が配列 Akibi の最小の要素であることから、部員 5 が最も早く空になることがわかる。

第3問 問2(カ・キ・ク)

- ・アルゴリズムのプログラムへの置き換え(空欄キ), 処理回数の判断(空欄ク)が問われた。
- ・空欄キでは、問題文にないアルゴリズムへの読み換え・具体化が求められた。
- ・空欄キの正答率は約60%, 空欄クの正答率は約20%で、特に空欄クについては、学力レベルの上位層でも50%以下にとどまった。

対策ポイント

日頃から身近なアルゴリズムを表すプログラムを読み書きするよう促すことが望ましい。その際には、扱う個数や人数を減らし、それらを配列等の適切な変数に格納して考えるように指導することや、アルゴリズムをプログラムの制御構造や条件に書き換えるように指導することが考えられる。また、作成したプログラムを実行した際の処理全体を追跡できる力を養うことが理想である。

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第3問】2/2

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

第3問 問3(ケ・コ・サ・シ)

- ・ 比較的長いアルゴリズムを理解し、プログラムを完成させて問題解決を行うことができるかが問われた。
- ・ プログラムの各行の意味や変数の役割が、問題文で説明されており、その内容に基づいて、多くの変数から適切なものを選択することが求められた。
- ・ やや複雑なアルゴリズムが含まれていたが、問題文の説明と各選択肢を照らし合わせて考えていけば正解を導くことができた(Nissuの添字はtantouの1~3に限られない、空欄サは空欄シより1小さい、など)。
- ・ 空欄ケ・コの正答率は50%を超えていたが、空欄サ・シの正答率は約40%にとどまった。学力レベルの上位層と下位層で、正答率の差が50%を超えており、文理差も10%を超えるものが多く、大きな差がついた。

対策ポイント

問題解決のプログラムには多くの変数が登場する。まずは、プログラムに登場する変数が何のために・どのように使われているのかを正しく理解するように促すことが重要であろう。また、プログラムの意味について考える際には、配列の添字の制限や複数の行の関係性なども利用して、プログラム全体のアルゴリズムを考えるように促すことが望ましい。

情報 I

問 3 次の文章を読み、空欄「ケ」～「シ」に入れるのに最も適当なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。

次に K さんは、工芸部の部員数と、表 1 のような各工芸品の製作日数を用いて、図 2 のような一覧を表示するプログラムをすることにした。

表 1 各工芸品の製作日数(再掲)

工芸品	1	2	3	4	5	6	7	8	9
製作日数	4	1	3	1	3	4	2	4	3

工芸品 1 … 部員 1 : 1 日目 ~ 4 日目
 工芸品 2 … 部員 2 : 1 日目 ~ 1 日目
 工芸品 3 … 部員 3 : 1 日目 ~ 3 日目
 工芸品 4 … 部員 [ア] : [イ] 日目 ~ [エ] 日目
 工芸品 5 … 部員 [ウ] : [オ] 日目 ~ [カ] 日目
 …
 工芸品 9 … 部員 1 : 7 日目 ~ 9 日目

図 2 各工芸品の担当と期間を一覧にしたメールの文面(再掲)

表 1 をプログラムで扱うために、K さんは工芸品の番号順に製作日数を並べた配列 Nissu (添字は 1 から始まる。) を用意した。さらに、工芸品数 9 が代入された変数 kougeihinsu、各部員が空になる日付を表 Akibi、部員数 3 が代入された変数 buinsu を用いて、図 2 のプログラムを作成した(図 5)。最初はどの部員も合宿初日すなわきであるため、(03) 行目で配列 Akibi の各要素を 1 に設定し、工芸品の番号を表す変数 kougeihin を用意し、(05) ~ (11) 行品に対して順に担当と期間を求めていく。破線で囲まれた(06) ~ (08) 行目における図 4 の(03) ~ (06) 行目と同じもので、次に割り当担当部員の番号を変数 tantou に代入する処理を行う。(10) 行行分を表示し、(11) 行目で担当部員が空になる日付を更新する

— 26 —

```

(01) Nissu = {4, 1, 3, 1, 3, 4, 2, 4, 3}
(02) kougeihinsu = 9
(03) Akibi = {1, 1, 1}
(04) buinsu = 3
(05) ケ を 1 から コ まで 1 ずつ増やしながら繰り返す:
(06) tantou = 1
(07) buin を 2 から buinsu まで 1 ずつ増やしながら繰り返す:
(08) | もし キ ならば:
(09) | | tantou = buin
(10) 表示する("工芸品", kougeihin, "…",
    "部員", tantou, "…",
    Akibi[tantou], "日目～",
    Akibi[tantou] + [サ], "日目")
(11) Akibi[tantou] = Akibi[tantou] + シ
    
```

図 5 各工芸品の担当と期間の一覧を表示するプログラム

ケ・コ の解答群

buin kougeihin tantou
 buinsu kougeihinsu

サ・シ の解答群

Nissu[kougeihin] Nissu[tantou]
 Nissu[kougeihin] - 1 Nissu[tantou] - 1
 Nissu[kougeihin] - 1 Nissu[tantou] - 1

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第4問】1/2

第4問
全体

データの活用に関する考察問題が中心であった。問1は尺度水準に関する基本的な知識を活用する問題を含むが、他の問題は与えられたデータを用いた考察問題であり、正解を選ぶためには散布図、箱ひげ図、相関係数などに関する理解が必要であった。

【平均正答率の状況】

- 文理別 データ数
 - 理系志願者(理系)データ数:67,507
 - 文系志願者(文系)データ数:48,403
- 学力レベル別 データ数 ※偏差値により学力レベルを分類
 - 上位(偏差値55.0以上)データ数 :38,291
 - 中位(偏差値54.9~45.0)データ数 :44,581
 - 下位(偏差値44.9以下)データ数 :33,847

区分	第4問 平均正答率(%)											
	ア・イ	ウ,エ(順不同)	オ,カ(順不同)	キ	ク	ケ	コ	サ	シ			
全体	29.0	91.2	89.6	84.0	74.6	21.7	73.3	86.3	68.1	89.6	71.0	
文理別	文系	27.3	89.2	87.3	79.9	71.2	16.8	66.1	83.6	61.4	87.5	64.3
	理系	30.2	92.7	91.3	86.9	77.2	25.2	78.5	88.4	72.9	91.1	76.0
学力レベル別	上位	44.9	97.1	99.0	93.6	93.3	35.7	95.1	96.6	93.4	98.5	89.8
	中位	24.3	91.7	95.4	78.3	83.2	17.0	79.2	90.6	73.3	93.1	73.4
	下位	17.3	75.9	79.9	56.4	67.4	12.2	41.0	69.2	32.6	75.0	46.9

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

第4問 問1(ア・イ)

問1 次の文章を読み、空欄 **ア** ~ **エ** に入れるのに最も適当なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。ただし、空欄 **ウ** ・ **エ** の解答の順序は問わない。

うさんは、表1を見せながら、T先生に相談した。

うさん：この表からわかる情報を把握しやすくするために、グラフを作ろうと思っています。

T先生：グラフを作る前に、表の各項目の尺度水準を確認してみましょう。地方については、どの尺度水準だと思いますか。

うさん：郵便番号などと同じで、**ア** だと思います。

T先生：そうですね。では、番号と地方以外の項目については、どうでしょうか。

うさん：これらの項目は旅行者数を示すので、**イ** でしょうか。

- ア** ・ **イ** の解答群
- ㉠ 比例尺度
 - ㉡ 間隔尺度
 - ㉢ 順序尺度
 - ㉣ 名義尺度

- ・ 尺度水準についての理解を問われた。
- ・ 提示されている例について正しい尺度水準を解答群から選択するという、基礎的な問題であった。
- ・ 正答率は約30%であり、学力レベルの上位層でも約45%にとどまっていた。受験生の多くが、教科書内容についての理解が不足していることが見受けられる。

対策
ポイント

基本的な内容や重要語句について、その理解と定着を重視し、演習に組み込んでいくことが望ましい。

情報 I

(1) 共通テスト分析 — 問題分析 【第4問】2/2

【問題別分析】

※共通テスト問題は、河合塾Webサイト(<https://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/kyotsutest/25/>)等をご確認ください。

問 2 次の文章を読み、空欄 **オ**・**カ** に入れるのに最も適当なものを、後の解答群のうちから一つずつ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

続いてUさんは、都道府県ごとの旅行者数と旅行目的の内訳が集計されている表2をもとに、さらに詳細な分析を進めることにした。

Uさんはここで、目的別の旅行者数の間にもどのような関係があるかについて関心をもった。そこでUさんは、図2のように、各目的の旅行者数を組み合わせた散布図を作成し、相関係数を求めた。

これらの散布図と相関係数のみから読み取れることは、**オ** ことや、**カ** ことなどである。

オ・**カ** の解答群

- ㉑ 二つの都道府県を比較して、観光等の旅行者数が多い方の都道府県は帰省等の旅行者数も必ず多い
- ㉒ すべての都道府県で、出張等の旅行者数は帰省等の旅行者数の1.5倍を下回る
- ㉓ それぞれの散布図で最も上に位置する都道府県は異なる
- ㉔ 各都道府県について、ある目的の旅行者数が多くなるほど、他の目的の旅行者数も多くなる傾向にある
- ㉕ 各都道府県で観光地をアピールすることで観光等の旅行者数を増やすことができれば、帰省等と出張等のいずれの旅行者数も増える

第4問 問2(オ・カ)

- ・ 散布図と相関係数についての理解が問われた。
- ・ 図と相関係数から読み取れることについて、文章正誤を判断する問題であった。
- ・ 正答率は約80%に達し、学カレベルの下位層でも約60%であった。受験生の多くが、他の教科での学習においても、図やデータを読み取る演習を重ねてきたためと思われる。

対策ポイント

複数の教科でデータを分析する力が求められることをふまえ、情報で身につけた力をさまざまな場面で活用させ、その定着・深化を促すことが望ましい。

図3と図4のいずれの散布図にも、直線の上側に白抜き丸で示した二つの点がある。各国の白抜きの二つの点について、**キ**。

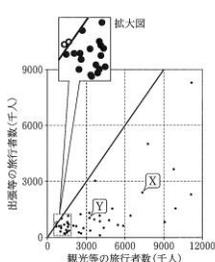


図3 出張等と観光等の旅行者数の組合せによる散布図

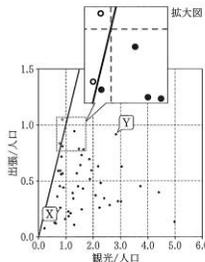


図4 [出張/人口]と[観光/人口]の組合せによる散布図

キ の解答群

- ㉑ 両方の図で同じ二つの都道府県を示している
- ㉒ 一つは両方の図で同じ都道府県を示し、もう一つは異なる都道府県を示している
- ㉓ 両方の図で異なる二つの都道府県を示している
- ㉔ これらの図からだけでは、同じ都道府県であるかはわからない

第4問 問3(キ)

- ・ 数量から割合に変換されたデータについて、そのデータの意味を理解することが問われた。
- ・ 散布図の作成過程を理解した上で考察することが求められる点で、難度の高い問題であった。
- ・ 正答率は約20%であり、60%以上の受験生が選択肢③を選択した。

対策ポイント

図(グラフ)の作成や数値の意味を考えさせる問題では、図を読む練習だけでなく、その図の作成過程や図中の数値の意味を説明させることまで含めて問題に取り組むように促すことが望ましい。

情報 I

(2) 課題と指導のポイント

■ 課題 ■

- ① 教科書で説明されている基礎的な知識を正確に習得する必要がある。
- ② 設定されている場面(問題の発見・解決)に即して、学んだ事柄を適切に活用する必要がある。
- ③ 数学で学ぶ事柄に基づく思考力が求められる問題に対応する力を養成する必要がある。



■ 学習対策—今後の指導— ■

- ① 教科書や問題集、定期テストなどで基礎的な知識の習得を促す。ただし、単なる暗記や計算の反復にとどめず、基礎的知識と実生活との関連(例:第2問Aなど)や、共通テストで問われる思考力・判断力との関連(例:第1問問1, 問4など)についても意識するように促す指導も求められる。
- ② 過去問などをとおして、場면을正しく理解する力、解答に必要な情報を抽出する力を養成することが求められる。ただし、受験生が取り組むことができる問題量には限りがあることを念頭に、(1)個々の問題を丁寧に扱う(答えを導くプロセスだけでなく、どのような問題に応用できるかなども説明する, など), (2)プログラムの作成, シミュレーションの実践, データの分析などに関する「濃密な演習」をとおして、問題解決のプロセスや学んだ事柄の活用を、受験生に体験・体感・体得してもらうことも重要となるであろう。
- ③ 数学で学ぶ事柄に基づく思考力が求められる問題(例:第1問問2, 問3など)に対応するには、数学についての理解が求められる。情報と他の教科とのかかわりはこれまでも言われていたことであるが、特に文系生に対しては、数学で学ぶ事柄を道具として使うという意識を持ち、情報で活用するように伝えることが求められる。